聖母女学院　創立１００周年記念誌

学校法人 聖母女学院

紡ぎゆく学び、さらなる高みへ

SEIBO 100TH ANNIVERSARY

聖母女学院 創立100周年記念誌

学校法人 聖母女学院

建学の精神

カトリックの人間観・世界観に
もとづく教育を通して、
真理を探究し、愛と奉仕と正義に生き、
真に平和な世界を築くことに
積極的に貢献する人間を育成する。

清水寺　森清範　貫主　揮毫

創立者のことば

聖母の子どもの一人ひとりが
家族のため　友のために
また社会において
真理の中に人々の心を結ぶ
平和の天使でありますように

創立者

R.Mère M. Clotilde Lutinier

レヴェランド・メール・マリー・クロチルド・リュチニエ

大阪・香里キャンパス

京都・藤森キャンパス

スクールシンボル

幼稚園

本学院の設立母体であるヌヴェール愛徳およびキリスト教的教育修道会の修道女で、聖母マリアの忠実（従順）な使者といわれた聖ベルナデッタは、フランスのルルドの洞窟で18回、マリア様の御出現を受けました。その時マリア様の足下に咲いていたといわれる野バラが園章となりました。

プリスクール　保育園　小学校　中学校・高等学校

エルミンという想像上の動物を中心に「OBEISSANCE ET PURETE」という、フランス語で従順と純潔を意味する文字がそれを囲んでいます。
エルミンはフランスの動物で、真白い毛皮に包まれた体が少しでも汚れると死んでしまうという言い伝えから、聖母女学院創立当初に純潔の象徴とされ校章となりました。

短期大学

地のブルーは聖母マリアの色、3つのリス（百合）は、従順・純潔・誠実を表し、型は、これら3つを楯として、内的、外的悪に立ち向かうよう、意味されています。

聖母女学院 理事長
赤野　孝一

紡ぎゆく学び さらなる高みへ

聖母女学院は2023年に創立100周年を迎えました。これもひとえに、今日まで聖母女学院を支えてくださった多くの皆様のご支援の賜と心より御礼申し上げます。

振り返りますと、設立母体であるフランスのヌヴェール愛徳修道会に現地の司教から日本への宣教の依頼があったのは1868年。それから修道会では祈りと議論が重ねられ、ついに46年後の1914年、日本に修道会を設立することが決議されました。その総会では何と200人ものシスター達が自分を派遣して欲しいと手を挙げられたとのことです。言葉も文化風土も異なる極東の日本への宣教は、祖国との生涯の決別は勿論、様々な苦難が予想される命がけの事業であったにも関わらずです。しかし、この年に勃発した第一次世界大戦の影響で派遣は延期となり、実施は大戦を機に起こったスペイン風邪の世界的大流行の収束を待たねばなりませんでした。そして1921年、7人のシスターが約40日間の長い船旅を経て神戸に上陸。シスター達の献身的な宣教へのスピリットが多くの方々の賛同と支援を集め、1923年、ついに大阪・玉造の地で聖母女学院は産声をあげたのでした。

では、シスター達は何のために本学を設立されたのでしょう。それは本学の建学の精神に明確に記されています。「教育を通して、真理を探究し」とありますように、この「真理の探究」こそが聖母女学院の教育の目的であり、真に人々のために貢献できる人間の育成の手段であることを高らかに宣言しています。

シスター達の宣教へのスピリットを土台として、先人が紡いでこられた弛みない「真理の探究」こそが、今日までの聖母女学院の発展の原動力であることは言うまでもありません。これからも未来を見据え「真に平和な世界とはどのような世界か。」「その実現のために自分はどのように生きるべきか。」を考え実践できる人間を育成する学園を目指します。

今後とも皆様の厚いご支援を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

INDEX

01　建学の精神
02　創立者のことば
03　スクールシンボル
04　発刊にあたって
06　祝辞

10　第1部 聖母女学院の100年
12　私たちが時代の先に見たもの
26　シスターが語る聖母教育
28　写真で見る聖母女学院のあゆみ
42　制服記念館
44　歴史年表
46　歴代所属長一覧

48　第2部 あたらしい時代に聖母の教育を
50　これからの100年に向けて
54　創立100周年記念式典・記念事業
56　第3部 時をかさね、築いてきたもの
58　香里ヌヴェール学院中学校・高等学校
60　香里ヌヴェール学院小学校
62　京都聖母学院中学校・高等学校
64　京都聖母学院小学校
66　京都聖母幼稚園
68　聖母インターナショナルプリスクール
70　京都聖母学院保育園
72　世代を超えた座談会
　　つながる聖母女学院Stories
80　卒業生メッセージ
85　聖母女学院創立100周年に寄せて
91　聖母教育支援センター
92　あとがき

聖母女学院の百寿聖五月

聖母女学院創立100周年おめでとうございます。

聖母女学院の歴史をたどりますと、フランスのヌヴェール愛徳修道会の来日に始まります。1921年5月8日、メール・マリー・クロチルド・リュチニエ他6人の姉妹がカスタニエ大阪司教に迎えられました。早速、5月24日には大阪・玉造に修道院を設立し、教育活動を始めています。そして、2年も経たない1923年3月には、「聖母女学院高等女学校」として認可を受けたのです。

その後、1932年に玉造より学校も修道院も香里に移転しました。また1949年には京都藤森に学校と修道院を開設して今日に至っています。現在は、学校法人としての聖母女学院が香里ヌヴェール学院として、大阪高松教区内香里で教育活動を継続してくださっています。この歴史については、創立100周年記念行事の一環として、玉造教会（大阪高松カテドラル・玉造聖マリア大聖堂）境内に掲示板が建立されました。

ヌヴェール愛徳修道会は、会員数の減少により、教育の主活動から撤退していますが、学校法人聖母女学院としてその建学の精神は引き継がれています。創立者レヴェランド・メール・マリー・クロチルド・リュチニエの「聖母の子ども一人ひとりが平和の天使でありますように。」との祈りが受け継がれています。

日本のキリスト教は少数派ですが、カトリック学校はじめキリスト教系学校は大きな影響を与えています。事実フランシスコ教皇も2019年11月23日来日早々、日本司教団に向かって、「信頼を得ている教会の教育の使徒職は、福音宣教の有効な手段であり、・・・」（教皇フランシスコ訪日講話集14～15ページ参考）とおっしゃいました。

「ともに歩む教会」（シノドス）の呼びかけでもありますから、聖母女学院も「教職員、生徒、保護者、卒業生、地域、教会など」とともに歩みながら、これからの150年、200年に向けて、絶えずカトリック学校の使命を推進していただきたいと希望いたします。

大阪高松教区大司教・枢機卿
トマス・アクイナス 前田 万葉

地球に住む人々とともに歩む若者たちを

聖母女学院が創立100周年を迎えられ、ヌヴェール愛徳及びキリスト教的教育修道会、学生・生徒・教職員・同窓生の皆様に、謹んでお祝いを申し上げます。大正から昭和の戦中戦後の激動時代を経て、平成、令和の時代に至るまで、聖母女学院が幾多の困難を乗り越え、苦労を重ねてきた百年の歩みは、まさに福音宣教のすばらしい証しであると思います。その道程を守り導いて下さった父である神に、皆様と心を合わせて、賛美と感謝をお捧げしたいと思います。

2023年現在の世界は、コロナによるパンデミックとウクライナ戦争を経験していますが、人々の間では、分断、差別、格差といった現象が加速しています。世界各国が持続可能な発展を模索する裏で、人間のいのちと尊厳を危うくし、平和を脅かす様々な非福音的なものが置き去りにされています。教皇フランシスコが言われるように、人類が同じ船に乗っている以上、個人も、社会も、国際政治においても、功利主義と利己主義を優先する行動は、人類に平和をもたらすことはありません。

今こそ、カトリックミッションスクールの存在が問われています。カトリック教会の教育事業は、いつの時代も生徒・学生一人一人の人生に奉仕するものですが、世界の変化にも福音的に参加してきました。そのために、ミッションスクールは、地球に住む人々とともに歩む若者たちを世界に派遣する使命を帯びています。人類の平和と正義の理想を探求し、理不尽な出来事に忍耐を持って立ち向かい、犠牲を強いられ、時流に逆らっても、正しく真実なものを選びとる人間を養成するのです。

百年の節目を迎えた聖母女学院が、この「救いの時、恵みの時」（Ⅱコリント6・2参照）を感謝のうちに受けとめ、神の助けと、聖母マリアの取り次ぎによって、力強く新たな歴史を拓いていくことを願っています。

カトリック京都司教
パウロ 大塚 喜直

祝辞

学校法人聖母女学院が創立100周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴学院は、1923年に大阪・玉造の地において創立され、以来、「従順と純潔」の校訓のもと、100年もの永きにわたり、国内はもちろん国際社会で活躍する人材を数多く輩出してこられました。今では、大阪・京都で保育園、幼稚園から高等学校まで9校もの学び舎を開校されており、総合学園としてそれぞれの発達段階に応じた専門的な教育と宗教的な人間教育を一体のものとして推進し、真に平和な世界の構築に積極的に貢献する人材の育成に尽力されています。また、毎朝の祈りの時間やミサ、ボランティア活動などのカトリックの人間観・世界観にもとづく教育や、活発なクラブ活動などを通して、気高い精神と揺るぎない知性を育んでおられます。こうした取組みは、児童生徒、保護者はもちろんのこと、教育界からも高い評価と信頼を得られているところであり、歴代の理事長をはじめ、関係の皆様の教育への情熱とたゆまぬご努力に対し、深く敬意を表します。

2025年に開幕を迎える大阪・関西万博では、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、ライフサイエンスやカーボンニュートラル等、様々な社会課題を解決した未来社会の姿を世界に発信し、次の世代にもつなげることにより、国際競争力の強化、成長の実現をめざしてまいります。このような中、貴学院が確かな判断力と実践力を兼ね備え、グローバルに活躍するリーダーの育成に努めておられることは、誠に心強い限りです。貴学院の取組みに大いにご期待申し上げますとともに、引き続き、大阪の教育力の向上にお力添えをいただきますようお願いいたします。

結びに、貴学院が創立100周年を契機として、さらなる飛躍と発展を遂げられますとともに、関係の皆様の益々のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

大阪府知事
吉村 洋文

祝辞

学校法人聖母女学院創立百周年、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

さて、聖母女学院は、大阪で誕生し、第二次世界大戦後に法人本部が現在の京都・藤森に移転されました。かつて旧陸軍指令部として使用されていた本館は、「真に平和な世界を築くことに積極的に貢献する人間を育成する」という建学の精神のとおり、平和を願う聖母女学院の象徴として、地域の人にも愛されながら、皆様と共に子どもたちを見守り続けてきたものと思います。

そして、今日に至るまで、保育園から高等学校までの幅広い教育を通して、多くの人材を国内外に育成・輩出していただいております。赤野理事長をはじめ歴代理事長、学校及び教会関係者の皆様方の御尽力に対しまして、改めて敬意を表したいと思います。

現在、藤森キャンパスには、すべてのキャンパスに通う子どもたちが、グローバル化に対応できる英語力を身につけられるよう英語教育をされています。社会的・文化的な様々な課題に対して自分の意見を言えるような国際感覚豊かな人材の育成にも努めていただいております。

聖母女学院の皆様におかれましては、私学発祥の地である京都において、子ども一人ひとりの可能性を最大限に活かす教育を実践されておりますことに、改めて感謝申し上げたいと思います。

私は就任以来、「子育て環境日本一」を京都府政の最大の重要課題としております。4月からスタートしております総合計画でも、社会で子どもを育てる教育実現のため、私立学校関係の皆様ともども、子育て環境日本一の施策を進化させてまいりますので、どうか引き続きの御支援、御協力を賜るようお願い申し上げます。

結びになりますが、改めて聖母女学院創立百周年をお祝い申し上げますとともに、今後ますますの御発展と、関係の皆様方の御健康と御多幸をお祈りいたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

京都府知事
西脇 隆俊

第1部

聖母女学院の100年

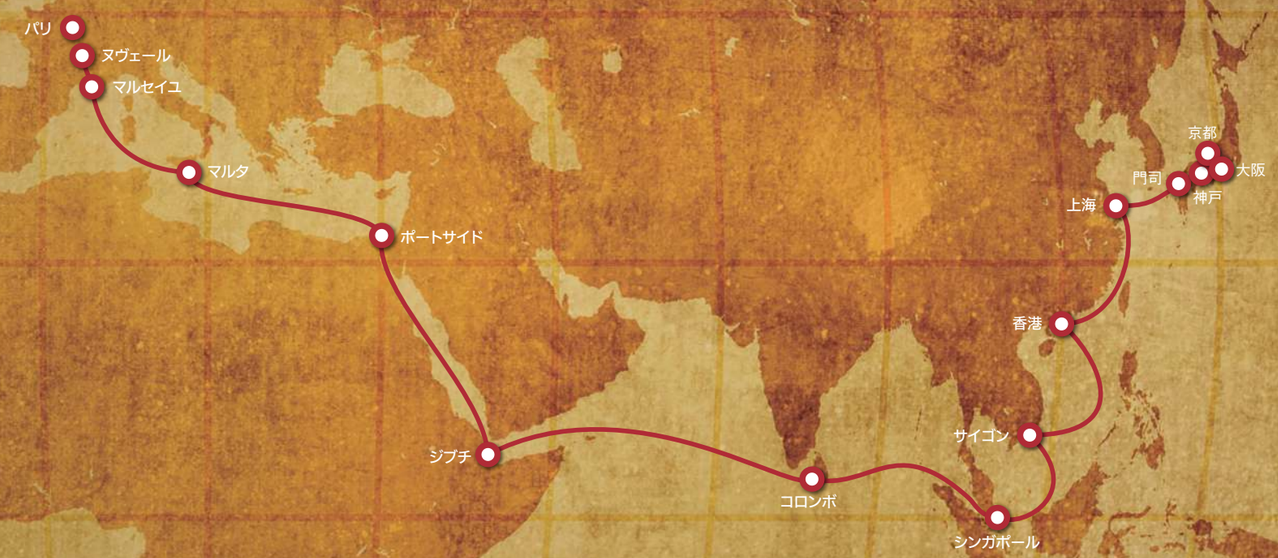
The Chronicle Of 100 Years

聖母女学院はいかにして誕生し、
どのように独自の教育を育んできたのでしょうか。
そのはじまりから現在までのあゆみを振り返ります。
ページをめくり、キャンパスに宿る人々の思いを感じてください。

私たちが時代の　先に見たもの

The Chronicle Of 100 Years

かつてフランス人のメールたちが大阪に教育の端緒を開いたとき
日本はまだ中等教育が十分に行き届かず、特に女子の就学が困難でした。
指導にあたった聖母女学院の先生たちはその眼差しの先に
「多くの女性たちが教育を受けられる未来」を見つめていたことでしょう。
その後もメールたちは活動の根幹にあるカトリックの教えを受け継ぎ、
日本社会の近代化にともない人々の暮らしが激しく変わっていく中で、
自分たちに何ができるかと都度考え、教育の場から理想を追求していったのです。
本特集では、日本社会の変遷と、そこで聖母女学院が目指したこと、
果たした役割について注目し、100年の時を俯瞰的にたどります。



7人のメールの熱き想い、海を渡る。

マルセイユ港を出港する7人のメール

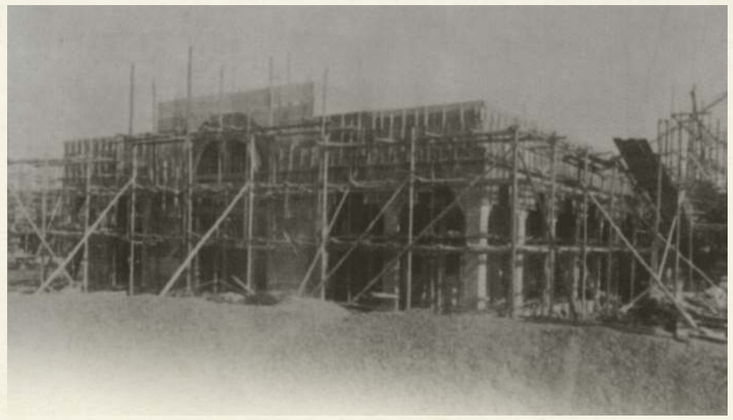
1921年3月25日、フランスのマルセイユ港から7人のメールを乗せた船が旅立ちました。彼女たちの目的は、ヌヴェール愛徳修道会の精神を継ぎ、遠く離れた日本に神の愛を伝えにいくことです。もちろん極東の地、日本への道のりは簡単ではありません。1ヵ月を超える航海期間には、荒波の中を進む日もあるでしょう。どんな危険に遭遇するかわかりません。また現地ではさらに多くの困難が待っていると予測されました。しかし、それにもかかわらず、日本への派遣が決まると驚くほど多くの会員が「私が行きます」と志願したといいます。貧しい人、不幸な人に奉仕することを目指すヌヴェール愛徳修道会の精神を受け継ぐ会員たちは、日本に赴いて自らの使命を果たせることに大きな喜びを感じていました。「貧しい人々のうちにキリストを見出し、彼らを愛し援助の手を差し伸べることこそ、あなたたちの心づかいの中心でなければならない」。それが彼女たちの心に刻み込まれた修道会の教えでした。

レヴェランド・メール（メール・マリー・クロチルド・リュチニエ）をはじめ、7人のメールらを乗せたアンドレ・ル・ボン号が沖へこぎ出すと、「私たちはミッションの地に向かっている！　神よ、私たちを日本へ派遣してくださることに感謝します！」と彼女らは口々に感謝の言葉を述べ、祖国に別れを告げました。船は、ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド（旅路を守る聖母）の祝福を受け、地中海へと進みます。紅海からインド洋を越え、途中何度か寄港しながら東シナ海を越えて日本へ。過酷な暑さに苦しめられましたが、40日の航海ののち、1921年5月8日午後に船はようやく神戸港にいかりを下ろしました。その後メールらは大阪に学校を開くため、まずは自分たちの住まいを探します。入国時に出迎えてくれた司教のはからいで、大阪の玉造教会の構内にある、かつて孤児院だった建物を仮住居とすることが決まると、メールたちはその場所で生活をしながら早速、人々に対して個人授業をはじめることにしました。それが聖母女学院の原点。フランスからやってきた一粒の麦は、こうして大阪の地に落ちたのです。

女子が進学したくてもできない。
かつてそんな時代があった。

明治・大正期。先駆的な海外諸国を手本として
日本は急速に教育環境を充実させていく。
しかし、男子のための教育が常に優先されており、
女子のための中等教育は遅れをとっていた。

「もっと学びたい」意欲を持つ
女子を受け入れたのは、
フランスからやってきた
メールたちの小さな学び舎。



The Chronicle Of 100 Years **1921~**

日本の女性に教育を

日本の女子教育は1899年の高等女学校令発布以降、着実に充実の一途をたどります。各地に高等女学校設置が進み、尋常小学校卒業後に進学意欲を持つ女子を受け入れる中等教育環境が整っていきました。しかし、そのような変化を経てもまだ、進学は一部の特別な人だけのものでした。1925年の進学率は15%未満という記録が残っています。

聖母女学院が日本に女性のための学校を開いたのは、ちょうどそんな時代です。フランスから海を渡ってやってきた7人のメールたちは大阪の玉造教会に拠点を築くと早速、大阪・神戸間に住む良家の夫人や若い女性向けに、それぞれの能力と個性を生かした個人レッスンを開始しました。当時は外国人からレッスンを受けることが大変珍しく、受講した生徒の評判が高かったこともあって、生徒数は次第に増えていきました。

そして1923年には27名の生徒と12名の職員で聖母女学院という女学校を設立しました。メールたちは、フランス語、英語、音楽などの授業を受け持ち、日本人の先生が国語や歴史、地理、習字などを担当しました。このとき創立者レヴェランド・メールは「従順と純潔」という理念を掲げ、常識ではなく、自分の内なる声に従う生き方を生徒たちに伝えていきます。良妻賢母の育成を目指す日本の教育とは異なり、神の愛と豊かな教養を中心とした聖母の教育により、生徒たちは自分の人生と世界を見つめる眼差しを得ることができました。

またメールたちは一人ひとりの生徒を「神様から預かった大切な子」と考え、常に生徒の成長と幸せを第一に考えました。フランスの本部から修道院建設のための資金が送られてきたときも、自分たちの伝道より「子どもたちのために使う」と決め、せっかくの大金を体育館と講堂の建設資金に充てました。そのような生徒を思いやる真摯な心が礎となって聖母女学院の評判は築かれ、より多くの女子生徒を受け入れられるよう発展していきました。

戦争がはじまると程なくして、外国人であるシスターたちは校舎の奥に軟禁され、憲兵が見張り役に立っていました。校長レヴェランド・メールは校長を辞任し、シスター古屋がその職に就きました。
戦時中は制服が禁止され、生徒たちはモンペ姿。シスターも修道服を脱いでモンペを履きました。
空襲の目標とならないように、校舎の壁はすべて真黒に塗りつぶされました。そして、戦争に使用する武器を増産するため、校門やスチーム・ボイラー等の金属類は、すべて供出させられてしまいました。また、食料増産のために、中庭や運動場は防空壕や芋畑になりました。学徒動員で門真の松下や枚方の香里の火薬庫に勤労奉仕に行きました。早く元の学院に戻ってほしい。誰もがそう願いながら勉強できない日々を過ごしていました。

（聖母女学院新聞第16･17号　虎岩信江先生手記より）

ナショナリズムの時代がようやくその幕を閉じる。
社会の混乱は著しく、人々は心の拠り所を求めていた。

命が軽んじられた時代に、
人のこころを育む聖母の教育を。

戦時中、校舎は真っ黒に塗られた。

The Chronicle Of 100 Years　1945~

戦後の混乱の中で

世界中を巻き込んだ第二次世界大戦の終結。敗戦により日本は焼け野原となり、街は荒廃していました。多くの日本人は国家への誇りを見失い、価値観の転換や食糧不足の中、生きることに必死でした。家族を失い、悲しみに沈む人の姿も少なくありません。こうした混迷の時代にカトリックの教えとそれに基づく教育は、荒れた心にやすらぎをもたらす救いとなっていきました。聖母女学院においても、1945年9月にはまだ物資が揃わない中、生徒の日常を取り戻すためにいち早く授業を再開。1946年には「メール来日25周年記念ミサ」を厳粛に執り行い、再び豊かな宗教的雰囲気が漂う行事の中で全校生徒が平和の喜びをかみしめました。

一方、長引く混乱の中で、救いを求める人々の想いはさらに募ります。「ぜひ京都にもカトリック学校を。」という願いは強固になり、地域で高い評価を受けていた聖母女学院に姉妹校開校の要望が寄せられました。本学院はこうした願いに応えるため、1948年から具体的な準備に取り掛かり、国有地の払い下げ申請を提出。ところが政府要人の中にはカトリックの学校建設に圧力をかけてくる人もいて、土地確保は思うように進みません。あるときには申請を取り下げるようにとさえ言われたそうです。しかし申請業務を担当したシスターは「神のみ栄のために始めたことですからどんな苦労にも耐え、決して手を引きません。」と強い意志を示し、周囲を驚かせました。

こうした信念に基づく粘り強い努力の結果、1949年に京都の藤森に新しい学校を開設することが認められました。校地となったのは、かつて陸軍第十六師団司令部が使用していた施設です。本部棟は戦時中から真っ黒に塗られており、戦後も瓦礫が散乱したままで、とても教育の場とは見えませんでした。メールたちはそんな荒れ果てた校地を根気強く整えていきます。またバザーを開くことで資金を集めて黒塗りの校舎の清掃を行い、学校として相応しいきれいな姿に戻していきました。こうして混迷の時代に安らぎをもたらす新たな教育の場が築かれ、聖母女学院のもう一つの物語がはじまるのです。

経済的に満たされることが
人にとっての本当の豊かさなのか。

建学の精神に立ち返って
人の心を育む教育を徹底。
またその精神を継ぐ
短期大学を立ち上げていく。

The Chronicle Of 100 Years **1960~**

変わる人・街・暮らし

1950年代の半ばから日本経済は諸外国にも類をみないほど、急速な経済成長を遂げます。貧しかった人々の生活は日々満たされていきますが、この急激な変化は深刻な社会問題も生みました。工業化政策と人口増加に伴う宅地造成で多くの山林などが消失し、日本と諸外国の間では貿易摩擦が発生。経済成長の激流の中で日本人はかつての豊かさを見失っていました。そのような変化の最中に聖母女学院は建学の精神に立ち返り、人の本質的な幸せを追求する人間教育を徹底します。そして、「できあがった答えを教わるだけでなく、真の問題意識を学ぶ場」としてのカトリック校の立ち位置を明確に示すことに務めました。

また1960年頃は女性の大学・短大進学率がまだ5%に満たない状況でしたが、学びの喜びを知った生徒や保護者から「聖母にも高等教育機関を」という要請が高まり、これを受けて1962年より聖母女学院短期大学家政科を開設しました。創設時には奈良女子大学や三重大学などの国立大学から教員が着任。先生の多くはミッションスクールの経験が少なく、本学院での指導に戸惑われることもあったそうですが、シスター方との対話を重ねることによって建学の精神をどのように教育に取り入れていけばよいのかを常に考え、皆で新しい短期大学を育てていきました。向学心の高い学生たちが教室の前の席で授業を受けるためこぞって早朝から学校に来る様子が見られ、短大の開設がいかに待ち望まれたものだったかがうかがえます。

そしてこの時代は、日本社会が世界に向けて急速に開かれていった時期でもあります。聖母女学院では当時の文部省が定めた英語のテキストに満足せず、近隣のキリスト教系の学校と共同で中学校1年生から高校3年生に向けたよりハイレベルな英語の教科書を編集しました。このほか短期大学には最新のランゲージラボを設けるなど教育環境を充実させ、国際化社会に通用する人材を育成する教育機関としての特色を強めていきました。

大災害などを経験して
社会基盤への不安が募った時期。
人と人が支え合って生きる
原点を見つめ直す教育を実践。

社会全体に不安が広がる中で普遍的な愛を語り続ける。

生徒、教職員、保護者が一堂に会したクリスマス・セアンスが行われた

The Chronicle Of 100 Years 1990~

生きる力と向き合う

日本は1990年代はじめにバブル崩壊を迎え、失われた20年と呼ばれる経済成長の低迷期に入ります。がむしゃらに頑張るそれまでの成長ムードから急激なシフトダウンが起こり、人々はどう生きるべきかを問われることになりました。またこの時代は湾岸戦争や阪神・淡路大震災、オウム事件などが発生し、人々が「生きる」ことに深い関心を寄せた時代でもありました。そんな中で聖母女学院のカトリック教育は、愛の心をもって生徒を導いていきます。

学生、生徒、児童たちを神の似姿として受け止め、尊敬と愛をもって接すること。そして一人ひとりが学校や教師から愛されていると自覚すると共に、真、善、美、聖という大きな価値観に触れ、それらを探求することで生き生きとした学校生活を送れるようにすること。また彼女らが神の愛を知り、感謝のうちに自分も周りの人を愛していく生き方を見つけ出すこと。そうした個々の人間形成・豊かな生涯の実現につながる教育を提供していきました。

愛を実践する一つとして、阪神・淡路大震災が発生した折には多くの学生・生徒や保護者、先生が支援活動に従事し、自分の意志で人を支える経験を積みました。短期大学の学生たちは述べ170人以上がボランティアの援助活動に参加。避難者への食事の支度、清掃、援助物資の整理などを行いました。高校の生徒たちも生徒会を中心に全校生徒に呼びかけ義援金という形で被災地支援を行っています。

このように社会の出来事とも積極的に関わりながら、人と人が支え合って生きていくあり方を指導しました。

阪神・淡路大震災被災地支援のために集められた援助物資

生き方の答えがない時代にこそ
カトリック教育が必要とされる。

聖母女学院の建学の精神を
成文化することによって
永久に揺らがないものとし、
ここから新たなスタートを。

毎日の登下校時にグロットのマリア様の前でお祈りする

The Chronicle Of 100 Years 2000~

自分らしさを問いかける

2000年代に入ると社会の変化は非常に激しく、それまでの常識だった終身雇用に綻びが見えはじめ、非正規雇用が増加していくなど、人の生き方を大きく左右するようになりました。特に女性の生き方は、結婚して家庭に入り主婦になるといった従来の価値観だけでは捉えられなくなっていきます。「お母さんのように生きる」というロールモデルが見えなくなり、どう生きることが幸せなのかをそれぞれが自身で考える必要が高まっていきました。聖母女学院はそのような時代にこそ、「人間とは何か。どうあるべきか」という問いへの答えとなる確たる人間観と信念を持つことがますます重要になると考え、そこにカトリック教育の意義を見出します。

折しも2004年にヌヴェール愛徳修道会が学校経営から実質的に撤退したことを受け、改めて自らの存在意義を確立する必要が生じていたこともあり、本学院では2005年に、永久に揺らぐことのないものとして聖母教育の意義を掲げるべく建学の精神の成文化を行いました。これが改めて掲げられた言葉です。

「カトリックの人間観・世界観にもとづく教育を通して、真理を探究し、愛と奉仕と正義に生き、真に平和な世界を築くことに積極的に貢献する人間を育成する。」

この学院で学ぶ者が神から愛されていることに気づき、神から与えられた可能性を十分に開花させるとともに、キリストにならって一人ひとりの人を大切にすることを学び、愛の精神をもって家庭－地域－世界にかかわっていくことができるように指導する。その想いを記しました。

少子化が進みはじめた日本では、今後ますます教育機関の変化と競争が予想されました。知育への要求はより強くなっていきます。しかし、大学への合格率だけが教育の成果を計る指標ではありません。実のある人間教育を実践することによって生徒たちの人生を切り開く力を養い、満ち足りた一生を叶える。そして、その一人ひとりの満足によって知られる学校として存在感を高めていこう。聖母女学院は改めてその想いを関係者一同で再認識し、未来へ紡いでいこうとしています。

The Chronicle Of 100 Years 2010~

そしていま、次の時代を見据えて

カトリック精神を軸に社会に必要な学びを提供してきた聖母女学院の役割は100周年を迎え、さらに重要性が高まってきていると言えます。世界の変化のスピードが加速し、これから訪れる社会を誰も予測できなくなっている中で、いま人々は、改めて人間とは何か、世界とは何か、私たちはどこからやってきて、どこへ向かうのかといった根源的な問いに向き合っています。人はこのような時代にこそ、自分たちがどうあるべきかを知り、それを指針に幸せな生き方を築き上げなければなりません。聖母女学院はそんな現代の要請に応え、人がより自発的に学び、地域や世界の人々と関わりあって、豊かな社会を築き上げていくための教育を提供し続けていきます。

個々に応じた学びをつくる
ICT教育の推進

より効率的かつ、一人ひとりの成長に応じた
教育環境を実現することを目的として
2014年より各校のインフラ環境を刷新し、
探究学習の導入を推進しています。
特に京都聖母学院小学校を教育モデルに、
より効果的なICTの活用を模索。
他校に先駆けChromebookを導入するなど、
充実した環境で、新たな教育が始まっています。

教師・生徒に一人一台のタブレット端末

図書館では犬型ロボット「雪丸」がお出迎え

世界を身近なものにする
国際教育の進化

国際社会で起こる問題を
世界の人々と共に解決できる人を
育むため、例えば京都聖母学院中学校では
3年生という早期から
英国の大学を訪問する語学研修を
提供するなど、世界に触れる機会、
知る機会を充実させています。

オーストラリアで現地校と交流

ルワンダ・レスキュー隊とガテラさん

通学路を自分たちの手で清掃

中高生が街頭で募金活動

新しいつながりを探る
共生の学び

人と人との新たなつながり方が
求められるこれからの時代に
必要な姿勢を育むため、
キリスト教の愛の精神に基づく
ボランティア活動や福祉教育などを
積極的に推進しています。

**聖母女学院はこれからもなお、独自の教育理念に基づく
人間育成の理想に向け、まっすぐに進み続けます。**

The sisters' words about Seibo education

シスターが語る 聖母教育

100年におよぶ歴史をもつ聖母女学院の教育は、数々のシスターによって支えられてきました。
ここでは、さまざまな年代の教育に携わってきたシスター、およびヌヴェール愛徳修道会アジア地区日本代表に、
かつての思い出や、これからも受け継ぐべき聖母教育について語っていただきます。

よりよい教育へ挑み続ける聖母であってほしい。

Sr. 小川 英子

私はこれまで小中高の校長を務め、短期大学の創立にも携わるなど、聖母女学院の発展に深く関わった一人だと自負しています。例えば1950、60年代に進められた、学習環境の改善をめざす藤森の三角屋根の校舎建設や、最先端の英語教育を行うLL教室の導入などは、私と当時の校長、先生方との議論の成果です。聖母女学院には、地域に先駆け、子どもが毎日を生き生きと過ごすための施策や考え方を取り入れてきた伝統があります。この先も、新しい時代の教育に挑み続ける聖母であってほしいと思います。

生徒の成長を見守り、私自身も育てられました。

Sr. 片岡 玉江

私が担当した宗教教育の授業では、生徒一人ひとりが「宗教とは何か?」「人としていかに生きるべきか?」を考え、文章としてまとめる機会を多く設けました。日々の学びや体験を自分の言葉でまとめることは、思考の深化や人格形成に不可欠であるためです。書く過程でわからないことがあれば、それもノートに書かせて私が回答する。そんなやりとりの中で考えを深めてもらいました。思い返すと聖母での日々は、生徒と一緒に活動する中で、私自身も共に成長し続けた日々だったと思います。

世界平和に貢献し続ける教育の実践を。

Sr. 鷹取 礼子

私は第二次世界大戦の最も激しい1945年(昭和20年)に聖母女学院の校名が変更されていた香里高等女学院に入学しました。いつ空襲されるかわからず、受験当日に警戒警報が発令されて、即、帰宅するような状況でした。卒業後教師として聖母にもどり、いろいろな困難を乗り越えて、生徒とともにクリスマス セアンスを行ったり、戦争の体験を書いたりして、平和の尊さを教えました。いつも謙虚に、この恵まれた毎日の生活を互いに助け合い、感謝の心で精一杯生きる事が大切だと思っています。

子どもたちを強く、立派な大人へと育て上げるために。

Sr. 森島 嘉子

私は小学校担任として、優しく、逆境に負けない「心の強い」人間を育てたいと考えていました。そこで特に重要視したのが、教室の外での学びです。例えば大きな木に登ったり、生き物が棲む池で遊んだり。自然の中では、思い通りにならない経験や教科書では得られない発見をたくさんするはず。そこで、困難に立ち向かう勇気や自分以外の存在を大切にする謙虚さを身につけてほしかったのです。大人になった教え子たちが、折に触れて当時の授業を思い起こし、世の中で活躍してくれていることを願っています。

子どもの想いや主体性を尊重することも、大人の仕事。

Sr. 二宮 昌子

小学2年生の担任をしたある年、私は学芸会の準備から発表まで、なるべく生徒だけに任せることを決めました。子どもたちには協働の力や自主性が十分備わっていると判断したのです。もちろん不安もありましたが、結果は大成功。保護者の方からも「子どもを信頼してくれてありがとう」とお言葉をいただきました。学校行事は生徒、家庭、教員が共に成長できる貴重な場。これからも聖母らしく、子どもを信じ、一人ひとりが力を発揮できる場を多く用意してあげることで、豊かな感性を育んでほしいです。

カトリックの価値観を人間形成に結ぶ、伝統の継承を。

アジア地区日本代表 Sr. 宰川ゆかり

聖母女学院が100年間、人々に求められ続けてきた理由。それは紛れもなく、他者の尊重を第一に考えながら行動することや、愛と奉仕と正義に生きることといった、カトリックの人間観・世界観に基づく教育の実践への賛意だと思います。いま、そしてこれから聖母の教育に関わる方には、カトリックが大切にする人間形成への姿勢を、ぜひ受け継いでいただきたい。カトリックがめざす、平和な世界を築く人材を輩出する聖母の伝統を、次世代へとつないでいただきたいと思っています。

写真で見る
聖母女学院のあゆみ

1923年、大阪玉造の地に小さな女学校が設立されました。
そのときから現在まで、100年という期間の中で、聖母の教育はどのように広がり、磨かれてきたのでしょうか。
ここでは1世紀に及ぶ本学院の歴史を写真などのビジュアル資料を中心に振り返ります。
ページをめくるとあなたにも、時代の移り変わりの中で絶え間なく変化を遂げてきた聖母女学院の姿が見えてくるでしょう。

聖母女学院設立のきっかけとなった ヌヴェール愛徳修道会について

ドゥラヴェンヌ師

サン・ソージュの教会

1680年、ベネディクト修道会司祭のドゥラヴェンヌ師は、当時の社会の要請に応え、すべての人々、特に物質的精神的に貧しい人々に奉仕することを目的として、フランス中部の寒村サン・ソージュで新しい修道会を設立します。会の当初の事業は、主に助けを求める人々を対象とするものであり、貧しい人々や病人を世話することや、子どもや婦人をキリスト教精神に従って教育することなどでした。創立者は「神は愛である」という聖書の言葉を修道会の標語とし、その精神を受け継ぐ会員たちは、修道誓願によって神に自己を奉献し、祈りと内的生活のうちに自己の聖化につとめると共に、そこから力を汲み取り、隣人への奉仕に献身しました。会の活動は時代と共に形を変えますが、関心は常に世界に向けられ、学校や診療所、社会福祉施設、寄宿舎、養護施設などの設立を通じて人々への奉仕が続けられました。日本に対しては第一次世界大戦が終わった1918年に修道会設立の準備がはじまり、1920年にレヴェランド・メール・マリー・クロチルド・リュチニエをはじめとする7人のシスターの日本行きが決まります。

ルルドのマリア様と共にフランスからやってきた
7人のシスター方が聖母女学院の礎を築く

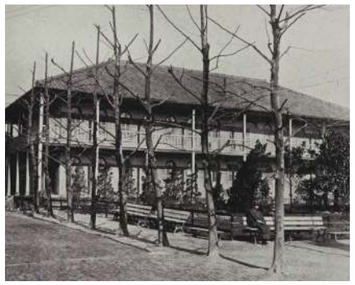
1921–1944

1921（大正10年）
7人のシスター方が
フランス・マルセイユ港を出発

7人のシスター方が来日

メール・マリー・クロチルド・リュチニエ
メール・グザビエ・デルマス
メール・アンリー・ラマドン
メール・シャール・ベルトラン
メール・スタニスラス・マリー・グルマン
メール・アニエス・クスチエ
メール・サンチープ・ドゥ・コルビオン

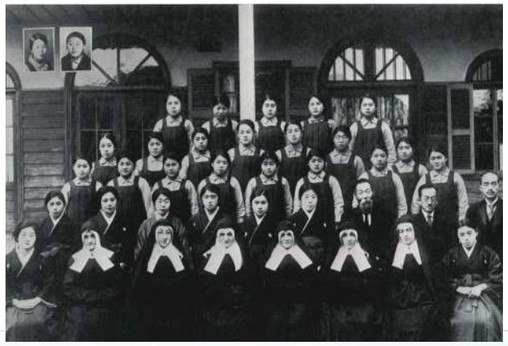
1923（大正12年）
聖母女学院開校



玉造校舎

1924年（大正13年）4月20日号サンデー毎日より

1928（昭和3年）
第1回卒業式　卒業生22名

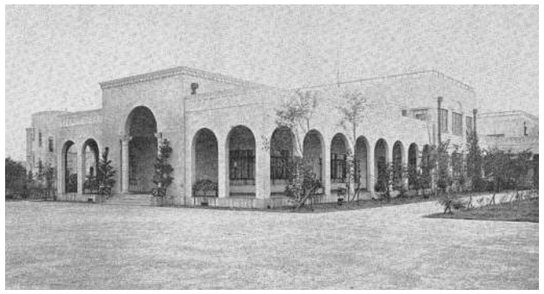


第１回卒業生

1932（昭和7年）
高等女学校 新校舎に移転
聖母女学院小学校開校

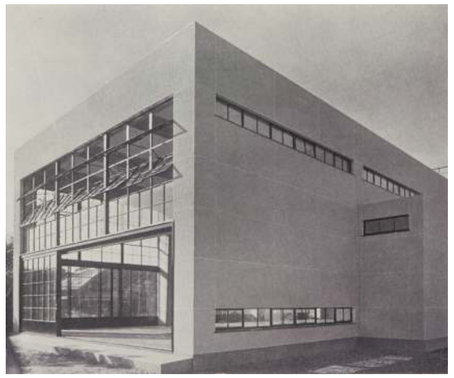
1931 年 鍬入れ式

設計者アントニン・レーモンド氏と共に



高等女学校新校舎

1938（昭和13年）
小学校雨天体操場と
高等女学校講堂・雨天体操場が完成



1940（昭和15年）
戦時中につき
レヴェランド・メール校長辞任

1941（昭和16年）
太平洋戦争勃発

勤労奉仕

呼び出し令状

なぎなた体操

1943（昭和18年）
統制により全国共通の制服となる

1944（昭和19年）
校名を『香里高等女学校』と改名

人々の願いから京都にもう一つの聖母女学院が開学
2つの校地でカトリックの女子教育を実践

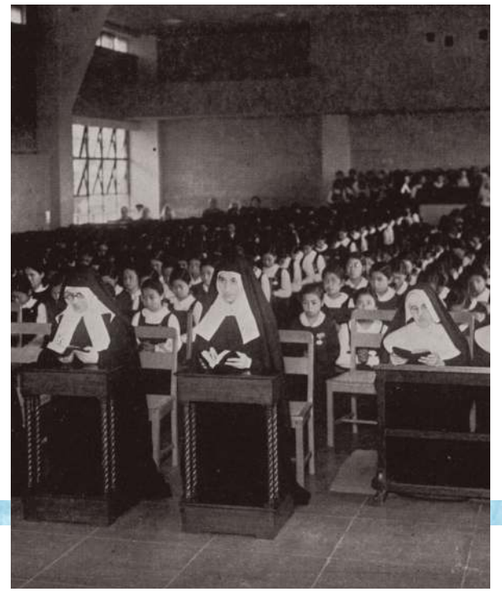
1945–1958

KOURI CAMPUS

香里キャンパス

1945（昭和20年）
終戦と授業再開

1946（昭和21年）
メール来日
25周年記念ミサ

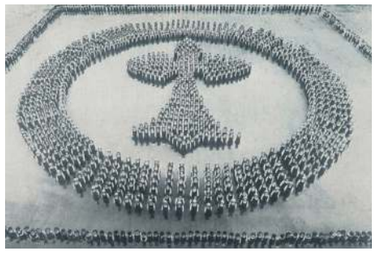


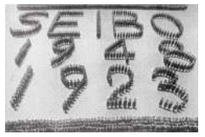
1947（昭和22年）
学制の改革により
聖母女学院中学校発足

「聖母」創刊号

1948（昭和23年）
聖母女学院高等学校発足
新制高校発足

聖母女学院　創立25周年記念





運動場で
生徒たちの人文字
SEIBO,1948（25周年）
1923（創立の年）

1951（昭和26年）
ルルドの洞窟が建立

マリー・フランス（人形）が届く

1958（昭和33年）
聖母御出現100年祭

2月11日、聖母御出現100年祭。
各地からの聖職者や同窓生合わせて
約2000名が参加

FUJINOMORI CAMPUS

藤森キャンパス

1949（昭和24年）
京都聖母女学院設立

開校間もないころの本館（1950年3月）

昭和24年4月18日、
開校式をかねて第1回小学校、中学校
入学式挙行

1951（昭和26年）
聖母女学院幼稚園開園

1952（昭和27年）
京都聖母学院高等学校開設

進学したい女性の学びを支える短期大学が誕生
10の教育施設を擁する学院として発展

1959–1971

KOURI CAMPUS

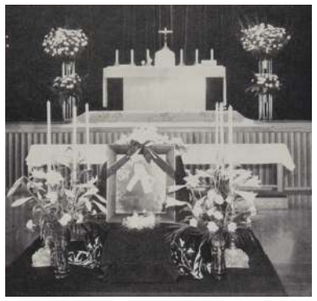
香里キャンパス

1960（昭和35年）
聖母女学院幼稚園開園

聖母女学院幼稚園開園（現香里ヶ丘）

1962（昭和37年）
聖母女学院短期大学家政学科開設

1964（昭和39年）
創立者レヴェランド・メール帰天



1966（昭和41年）
女学生専用電車となる

1967（昭和42年）
プール完成

1970（昭和45年）
日本万国博覧会バチカン・ナショナルデーに参列

1966（昭和41年）
姉妹校での定期戦が始まる

FUJINOMORI CAMPUS

藤森キャンパス

1962（昭和37年）
プール完成

1963（昭和38年）
京都聖母女学院小学校校舎完成

小学校竣工式

1966（昭和41年）
聖母学院中学・高等学校校舎竣工

1968（昭和43年）
聖母女学院短期大学児童教育科開設

短大児童教育科の教育実習

短期大学児童教育学科旧校舎

1969（昭和44年）
聖母学院中学校・高等学校体育館兼講堂竣工

間宰谷真吾氏が設計

海外校との提携やインドやタイへの支援がスタート
小学校では男女共学のあゆみがはじまる

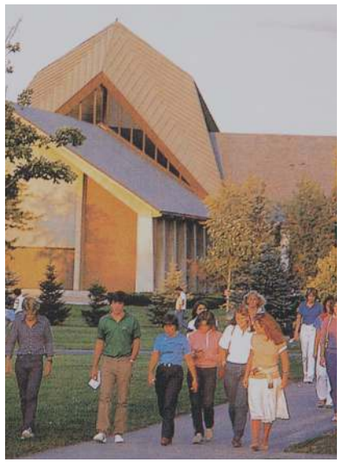
1972–1992

KOURI CAMPUS

香里キャンパス

1980（昭和55年）
ベルナデッタ帰天100周年記念
ベルナデッタ・ホール（体育館）完成

1984（昭和59年）
米セントマイケルズ・カレッジと
姉妹校提携



1988（昭和63年）
聖母女学院小学校
男女共学となる

1991（平成3年）
第1次タイ隊支援が
始まる

FUJINOMORI CAMPUS

藤森キャンパス

1972（昭和47年）
聖母学院幼稚園
新園舎設立

1978（昭和53年）
聖母学院中学校・
高等学校 東館竣工

1979（昭和54年）
聖母女学院短期大学
新学舎完成

1980（昭和55年）
聖母学院中学校・高等学校
インド　ボーイズ・タウンへの
支援が始まる

1981（昭和56年）
聖母女学院短期大学
新学舎に全学移転
統合完了

1986（昭和61年）
聖母学院小学校　新校舎竣工

創立70周年の記念式典を厳かに執り行う
震災後は多数の関係者がボランティア活動に参加

1993–2010

KOURI CAMPUS

香里キャンパス

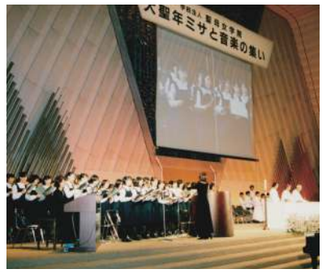
1993（平成5年）
香里セミナーハウス
完成

1993（平成5年）
創立70周年記念式典

1995（平成7年）
阪神・淡路大震災後
ボランティアへ積極的に参加

1997（平成9年）
マリー・クロチルド記念
プール竣工

2000（平成12年）
大聖年記念式典
「大聖年ミサと音楽の集い」



2010（平成22年）
大阪聖母学院小学校
アフタースクール開講

FUJINOMORI CAMPUS

藤森キャンパス

1994（平成6年）
聖母学院小学校
ルワンダ・
レスキュー隊
支援が始まる

1995（平成7年）
聖母学院中学校・
高等学校 北館竣工

2001（平成13年）
カナダ夏期
英語研修開始

2006（平成18年）
聖母学院小学校
学童保育室設置

2009（平成21年）
創立90周年記念事業開始

藤森キャンパス正門リニューアル工事実施

2010（平成22年）
聖母学院中学校・高等学校
耐震補強及び
リニューアル工事

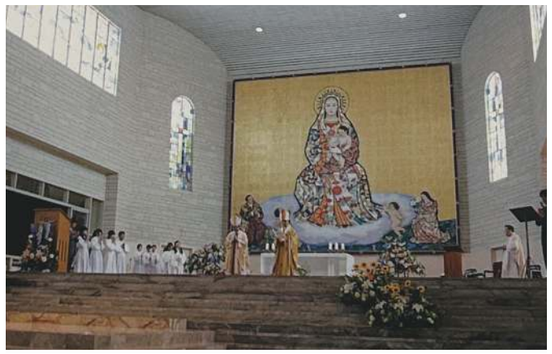
歴史を刻んできた藤森校舎が国登録有形文化財に登録
老朽化した施設を改装し、教育環境を充実させる

2011–2023

香里キャンパス
KOURI CAMPUS

2011（平成23年）
大阪聖母女学院中学校・
高等学校
耐震及び
リニューアル工事

2013（平成25年）
創立90周年記念式典



2017（平成29年）
香里ヌヴェール学院小学校
香里ヌヴェール学院中学校・
高等学校（男女共学）と校名改称

2022（令和4年）
香里ヌヴェール学院小学校
図書館リニューアル

香里移転90周年記念食堂（ルルドホール）完成

藤森キャンパス
FUJINOMORI CAMPUS

2011（平成23年）
聖母学院幼稚園バス
運行開始

2012（平成24年）
聖母学院小学校図書館
平湯モデルにリニューアル

聖母学院幼稚園
給食開始

クリスマスイルミネーション点灯式

2016（平成28年）
国登録有形文化財（建造物）に
登録

聖母女学院本館（藤森キャンパス）

2018（平成30年）
京都聖母学院保育園
聖母インターナショナルプリスクール開園

京都聖母女学院短期大学閉学

2021（令和3年）
京都聖母学院幼稚園
満3歳児クラス開始

2023（令和5年）
南門周辺整備事業実施

制服記念館

創立以来愛されてきた、気品や知性を感じさせる制服の伝統は、
新しい時代の息吹を吹き込みながら受け継がれています。

創立の頃の制服を着た
リカちゃん人形

制服の原点

冬服は設立当初より丸襟白ブラウスと紺のジャンパースカート、夏服は半そでブラウスに紺のジャンパースカートでした。

幼児教育

幼稚園

保育園

プリスクール

※幼稚園の現夏服は聖母女学院幼稚園創立当初のものと同じデザインです。

小学校

>> 香里

2010年より男子制服にネクタイ導入

>> 藤森

男児の制服

開校時からの夏服

2015年から男児ブレザー導入

2013年 新しい夏服

中学校・高等学校

>> 香里

1962年～

1991年～

2011年～

1998年～

2017年～

2011年～　2017年～

>> 藤森

1960年～

1974年～

1996年～

2017年～

2013年～

短期大学

>> 聖母女学院短期大学で開学当初から
使われていた制服

歴史年表

※「学舎」欄は出来事が起こった場所を示す。 ○:学院全体　玉:玉造学舎　香:香里学舎　藤:藤森学舎

年	月	学舎	出来事
1921	3	○	フランスの「ヌヴェール愛徳及びキリスト教的教育修道会」より、レヴェランド・メール・マリー・クロチルド・リュチニエをはじめ、7人のシスター方がフランス・マルセイユ港を出発
1921	5	○	7人のシスター方、神戸港に到着
1921	5	玉	大阪玉造にヌヴェール愛徳修道会設立（当時：大阪市東区記国町）
1923		玉	聖母女学院設立認可。聖母女学院開校。大阪玉造カトリック教会内に居を定め、語学・音楽・絵画・手芸の個人教授開始。創設時の生徒数27名
1925		玉	聖母女学院高等女学校認可。校章が制定される
1928		玉	第1回卒業式 卒業生22名
1931		香	北河内郡友呂岐村大字三井（現在地）に現在の校舎（A・B・C棟2階部分まで）建設工事始まる。鍬入れ式挙行。設計はアントニン・レーモンド氏
1932		香	新校舎（A・B・C棟）竣工移転。全生徒数72名。聖母女学院小学校開校。開校時の児童数13名
1932		香	校歌完成。5年生生徒による作詞、作曲はメール・スタニスラス・マリー
1933		香	聖母女学院小学校第1回卒業式（4名）
1936		香	「かをり」第1号発行
1938		香	小学校雨天体操場と高等女学校講堂・雨天体操場が完成
1940		香	1940年～1945年戦時中につき、レヴェランド・メール校長辞任（シスター古屋が校長代行）
1943		香	聖母の制服が廃止され、統制により全国共通の制服となる。校舎の外壁は真っ黒に塗られる
1944		香	校名を『香里高等女学校』と改名。シスター方は修道服を脱いでモンペ姿となられる。一年生以外は全員工場へ
1946		香	メール来日25周年記念ミサ。レヴェランド・メール校長職復帰
1947		香	学制の改革により聖母女学院中学校発足。聖母女学院小学校と改称
1947		香	聖母女学院校友会運動部発足　テニス・ソフトボール・バスケット・卓球・バレー
1948		香	新聞部発足「聖母」第1号発刊。6・3・3・4制の新しい学制の開始に伴い現D棟の場所に中学木造校舎完成。学制の改革により聖母女学院高等学校発足。聖母女学院創立25周年記念及び祝賀会を開催

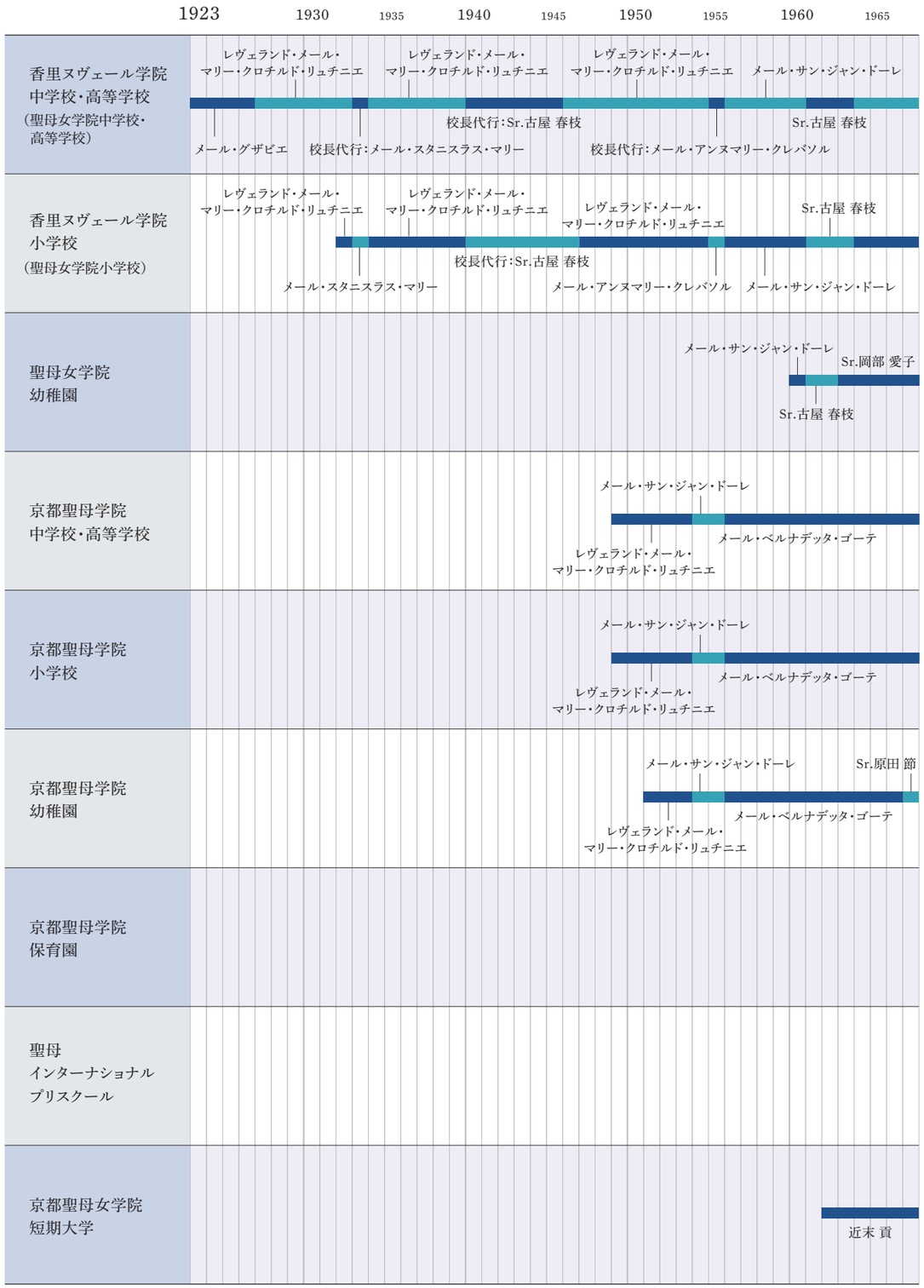
年	月	学舎	出来事
1948		藤	京都紀伊郡深草村にあった旧陸軍第十六師団司令部の土地2万坪及び建物の払い下げを受ける
1949		香	聖母女学院高等学校第1回卒業式（21名） 高等女学校最後の卒業式（22回80名）
1949		藤	京都における最初のカトリック学院として京都聖母女学院設立。京都聖母女学院小学校17名・京都聖母女学院中学校81名 メール・マリー・クロチルド・リュチニエが初代校長に就任
1951		○	財団法人より「学校法人聖母女学院」に組織変更
1951		香	校門横にフランスのルルドに習ってルルドの洞窟が建立される
1951		藤	校名を「京都聖母女学院」とする。聖母女学院幼稚園が開園 伏見カトリック教会献堂式
1952		藤	京都聖母学院高等学校認可・開校。木造校舎移動改築が完成 第1回中学校卒業式
1954		香	京阪電鉄による聖母女学院生徒用専用電車の運転再開 現E棟竣工
1954		藤	レヴェランド・メール校長職引退。校長・園長にメール・サン・ジャン・ドーレが就任
1954		○	聖母行列に参列
1956		香	レヴェランド・メール校長職引退。第2代校長にメール・サンジャン・ドーレが就任
1956		藤	校長・園長にメール・ベルナデッタ・ゴーテが就任
1956		香	同窓会東京支部発足
1957		藤	小学校第1期工事完了。京都聖母女学院小学校が男女共学制となる。小学校の共学化に伴い「聖母学院幼稚園」と改名
1958		○	聖母御出現100年祭実施
1959		香	聖母女学院、からし種クラブ創設
1960		香	枚方市香里ニュータウンに聖母女学院幼稚園開園
1962		香	聖母女学院短期大学家政科を開設。初代学長に近末貢博士が就任
1963		藤	同窓会だより第1号発行
1968		藤	聖母女学院短期大学に児童教育科を設置認可・開設
1968		○	マ・メールの呼称がシスターに

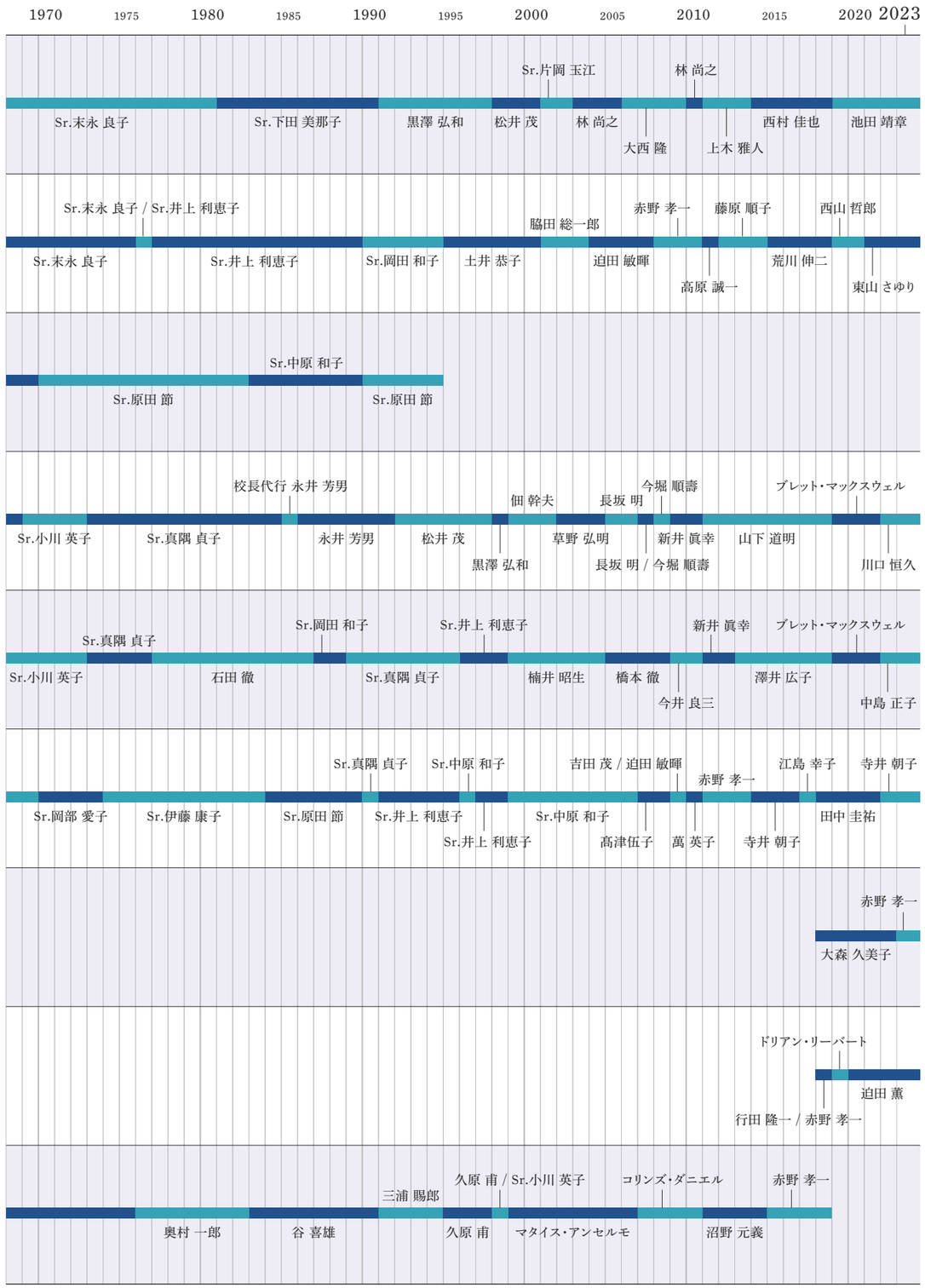
年	月	学舎	出来事
1970		香	日本万国博覧会バチカン・ナショナルデーに参列
1974		香	聖母女学院短期大学に専攻科児童教育専攻を設置
1978		藤	聖母学院幼稚園園長にシスター伊藤が就任 聖母学院小学校・中学校創立25周年記念式典挙行
1979		香	聖母女学院同窓会「かおり会」と命名
1979		藤	聖母女学院短期大学 統合学舎竣工
1981		藤	聖母学院同窓会関東支部第1回総会
1983		藤	聖母女学院短期大学家政学科と児童教育科が統合
1984		香	60周年記念「夏の欧州巡礼の旅」実施
1984		香	米セントマイケルズ・カレッジと姉妹校提携
1986		藤	聖母学院小学校に12歳のイエズス像を設置
1988		香	聖母女学院小学校 男女共学となる
1988		藤	聖母女学院短期大学に国際文化学科を開設
1991		香	シスター下田校長退任 聖母女学院小学校が「大阪聖母学院小学校」と改称
1993		香	（学）聖母女学院創立70周年記念式典開催 香里セミナーハウス完成
1993		藤	短期大学に専攻科国際文化専攻を設置
1994		香	聖母女学院幼稚園休園
1997		香	聖母女学院A・B棟が文化庁の文化財登録制度に登録有形文化財として登録
2000		○	大聖年記念式典「大聖年ミサと音楽の集い」開催（国立京都国際会館にて）
2003		藤	聖母学院小学校に国際コースを開設
2008		藤	短期大学が生活科学科、児童教育学科の2学科に改組
2008		藤	クリスマスイルミネーション開始
2008		香	成人の集いを聖母女学院高等学校とかおり会の共催で開始
2009		○	創立90周年記念事業開始
2009		藤	学童保育「プチパ」開設
2009		藤	聖母学院中学校・高等学校 新コース体制実施
2009		藤	小学校・中高・聖母学院同窓会共催「成人のつどい」開始

年	月	学舎	出来事
2011		香	大阪聖母女学院中学校・高等学校に改称 ジャケットスタイルの新制服導入
2011		藤	京都聖母学院幼稚園、京都聖母学院小学校、京都聖母学院中学校・高等学校、京都聖母女学院短期大学に改称
2013	6	○	聖母女学院90周年式典開催
2014		藤	「聖母学院同窓会60周年感謝のミサ」記念総会　大塚喜直司教様司式
2015	4	藤	京都聖母学院中学校・高等学校　中学1年生からグローバルスタディコース（GSC）を設置
2015	4	藤	京都聖母学院中学校・高等学校　最難関国公立コース（Ⅲ類）設置
2016	2	藤	本館、国登録有形文化財に登録される
2016	4	藤	京都聖母学院高等学校　高校1年生から看護系大学進学コース　設置
2017	4	香	大阪聖母学院小学校が「香里ヌヴェール学院小学校」と校名改称
2017	4	香	香里ヌヴェール学院小学校、スーパースタディズコース・スーパーイングリッシュコース新設
2017	4	香	大阪聖母学院中学校・高等学校が「香里ヌヴェール学院中学校・高等学校」と校名変更。男女共学化
2017	4	香	香里ヌヴェール学院中学校・高等学校　コース体制をSAC・SEC・GSC（高校のみ）に改組
2018		藤	京都聖母学院保育園・聖母インターナショナルプリスクール開園
2018		藤	京都聖母女学院短期大学閉学
2019		香	成人の集いを香里ヌヴェール学院とかおり会、さくら会の共催で開催
2021	4	藤	小学校総合コース「総合フロンティアコース」に名称変更
2022		香	香里移転90周年記念　大阪司教区前田万葉枢機卿ミサとルルドホール祝別式
2023	6	○	聖母女学院創立100周年記念式典開催

歴代所属長一覧

※創立当時はヌヴェール愛徳修道会本部があるフランスの言葉で「マ・メール」とお呼びしていたが、現在は英語の「シスター」を用いている。
※創立者レヴェランド・メール・マリー・クロチルド・リュチニエ





第2部

あたらしい時代に聖母の教育を

Prospects for a new era

不安定化する世界情勢、急速な技術の発展、人々の価値観の変化…。
予測できない未来に向けて社会が進んでいく中で、
聖母女学院の教育は今後どのような役割を果たしていくのでしょうか。
100周年の現在、これからの時代に目を向けます。

これからの100年に向けて

聖母女学院 理事長
赤野　孝一

100年目の節目を迎え、聖母女学院はこれからどのような歩みを進めていくのか。
これまでの歴史の中で築き上げてきた教育価値を振り返りつつ、
今後決意も新たに目指していく姿を、赤野理事長にお話しいただきました。

聖母女学院のはじまりについて、どのような想いをお持ちですか。

フランスのヌヴェール愛徳修道会よりやってきた、7人のシスター達が大阪市玉造に小さな学校を開設したのが、いまからちょうど100年前のことです。しかし実は聖母女学院の歴史を語るためには、さらに50年以上も時代を遡らなければなりません。ことの発端は1865年。このとき長崎の大浦天主堂にて、潜伏していたキリシタンたちが信仰の告白をするという出来事があったのです。これに立ち会ったプチジャン神父は大変喜び、フランスのフォルカード神父に「日本にも信者がいる」と報告をされています。フォルカード神父はかつて布教のために日本上陸を目指しましたが、鎖国中であったために捕らえられ、本国に送り返された経歴を持つ方です。この報告は神父を大いに勇気づけたことでしょう。1868年にヌヴェール愛徳修道会に、「彼の地の信者のため、ぜひ日本に行ってほしい」という依頼をされました。しかし、当時日本に赴くことは一大事です。ヌヴェール愛徳修道会では極東の国である日本に行くための議論をそこからなんと40年以上も続け、ついに実行の判断が下されるのですが、計画は第一次世界大戦の勃発やスペイン風邪の流行に阻まれて延期に。その後、1921年にようやく実現となりました。本学院の歴史の第一歩として語られるシスター来日の背景に、この壮大なストーリーがあることをまず理解しておく必要があります。だからこそ日本に赴く希望者を募った際には、修道会に所属する200人もの人々が迷うことなく手を挙げました。その中から選ばれた7人は、修道会全体の想いを背負って日本にやって来たのです。

当初シスター達は、どのような教育を行ったのでしょうか。

来日されたシスター達は相当な苦労をされたことと思います。彼女達が話す言葉はもちろん通じませんし、潤沢な資金もありません。おそらく湿度の高い日本の気候は修道服での生活に向いていなかったことでしょう。また学院創立の1923年は関東大震災が起こった年です。おそらく世情も不安定だったはずです。そのような中でシスター達は一生懸命学校の基盤をつくり、発展させ、1932年には香里に現在のキャンパスを設けられています。この1930年代初頭は日本がどんどん軍国主義に向かい、彼女たちの母国であるフランスやイギリスと敵国になっていった時期ですから、心中には非常に複雑な想いがあったでしょうね。しかし、それでもなお彼女たちは信念に基づいてカトリック教育を実践されました。まだご存知ない方はぜひ香里キャンパスを訪れてみてください。大理石の100メートルの廊下が続く、レーモンド建築の素晴らしい校舎です。当時の記録を読むと、子どもたちに最高のものを提供したいというのが創立者の考えでした。だから母国から送られた寄付金を惜しみなく使い、立派な校舎を建てたのです。制服についても、一番上等な布を持ってきて、たくさんドレープをつくって贅沢に仕上げました。しかしそれと反対に、シスター達の生活はものすごく質素なものでした。本当に自分たちのことを一番後にして、子どもたちのためにという姿勢で活動されたのです。おそらくそういう姿勢が多くの人々の共感を呼んだのだと思います。当時を知る卒業生の方にお会いすると、シスターにかけてもらった言葉がいまでも心に残っているとおっしゃる方が多くおられます。シスター達の情熱こそが人の心を動かし、聖母女学院の発展の原動力となったのです。

これまでに聖母女学院が確立してきた教育は、どのようなものと言えますか。

それを知る一つの手がかりは、本学院が「どんな人を育んできたか」にあります。聖母女学院生らしさというのは、一言でいえば、やはり人に対してやさしいところだと思います。例えば東日本大震災が起こったときも、ある卒業生が「会社で募金を集めました」と自発的に義援金を持ってきてくれました。このようなエピソードはあちこちから聞こえてきます。聖母女学院生は困っている人、苦しんでいる人たちのために自然に動ける人なのだと思います。

これはもちろん本学院の教育が、カトリックの教えを土台にしているからです。創立者は「人々の心と心をつなぐ平和の天使でありなさい」という言葉を残されており、創立時から豊かな人間教育の土台を築き上げて来られました。先人たちはそれを受け継ぎ、発展させてこられました。だからこそ、このキャンパスで学ぶ子どもたちは、人を大切に想い、人のために行動することを素晴らしいと考える価値観を、自然に肌から染み込むように身につけていくのだと思います。また本学院の建学の精神には、「真理を探求する」という言葉が入っていますが、これは「人間にとって本当の幸せとは何か」を探し求めていく行為を意味しています。そしてそれは、「自分の力を人々のためにどう活かすか」という探求でもあります。「一人ひとりに、生まれた瞬間から与えられているミッションがある」というカトリックの人間観を私たちは信じています。子ども達は聖母女学院で様々な学習や体験、友達や先生との関わりをとおして、自分が大好きなこと、面白そうだと興味を持てることに出会っていくことでしょう。そしてそのことを追求していくなかで、どんな進路を選びどんな職業を目指していくかを選択していきます。その過程において「人々のために」を考えることこそ聖母女学院の教育だといえます。

これからの時代に、聖母女学院はどのようにありたいと思われますか。

少子化が進む日本では、子どもたちの数が減り、先生も少なくなっていくため、学校の運営環境が厳しくなることは避けられません。しかし、これからの時代において、聖母の教育はますます求められていくでしょう。私たちは今後もカトリックの精神を土台とした学校の個性をより強く発揮することに全力を尽くさなければなりません。かつてのシスター達の奮闘ぶりを思い描きながら、教職員全員が一丸となって、もう一度原点に立ち戻りチャレンジしていこうと思います。シスター達は、「子どもたちに最高のものを」という考えを偽りなく貫き通したからこそ、信頼を得ました。それはきっと、これからの時代も同じだと考えています。

また、聖母女学院は「学びの場所」であると共に「帰る場所」でなければなりません。もともとカトリックにおける教会は、「帰るところ」を意味しているんですね。本学院はそれと同じ。ここで学んだことを糧に社会で精一杯頑張って、それでもうまくいかなくて傷ついたときは、ここに帰ってきて先生たちと話をすることで自分を取り戻し、もう一度頑張ってみようと立ち上がれる。これまでもそういう場として役割を果たしてきましたし、これからもそうでなければならないと思います。だからまずは私たち教職員が帰ってきた子らに、元気な姿を見せられるようにしておかないとダメですね。

現在は変化の時代と言われますが、今後はどのような教育が求められるでしょうか。

AIの進歩によって、わざわざ人間がやらなくても、いろいろなことがより正確に素早くこなせる便利な時代がやって来ています。教育に関しても、苦労して知識を詰め込む意味は薄れていくでしょう。しかしそうなれば今度は、人間がより充実した生き方を実現していくために、「何を学ぶべきか」が問われることになるのではないでしょうか。また同時に、どう学ぶのかも重要な課題。本当に大切なことは、デジタルツールからではなく、人と人が触れ合うことでしか学べないのだということがはっきりしてくるのかもしれません。そして、そんな時代の中では、私たち聖母女学院の追求してきた教育がますます必要とされていくように思います。人間が本当の意味で幸せになるというのは、どういうことなのか。必要なモノで満たされた状態も一つの幸せではあるが、果たして自分だけが幸せであればいいのか。ひょっとすると自分がどれだけ満たされていても、周りの人たちが苦しんでいるのであれば、それは幸せとは言えないんじゃないか。理屈ではなく、心がどう感じるのかを確かめながら、一歩ずつ真理を探求していく。今後の社会を生きる人は、そういう姿勢をますます大切にしなければならないと思います。

聖母女学院の卒業生の方々にメッセージをお願いします。

私はいま、100周年の行事を通じて、本当にいろいろな方々がこの学院に想いを寄せてくださっていることを感じています。創立者をはじめとするシスター方、OB・OGの方、旧教職員の方など、それぞれの立場から聖母女学院に多大な期待をいただいており、いまを預かる私たちはそれにしっかりと応えていかなければなりません。先ほども申し上げた通り、これからもカトリックの学校としての個性を大切に、しっかりと人を育んでいく教育を実践し、活気ある学校をつくっていくことを目指してまいります。ですからぜひ皆さん、聖母女学院に帰ってきてその教育の様子をどうかご自身で確かめてください。そしてそのときに、あなたの後輩たちを励ましていただければと思います。

創立100周年記念式典・記念事業

聖母女学院が創立100周年を迎えるにあたり、先人たちの歩みについて思いを馳せ、
関係者の意識を一つにし、また新たな歴史を築いていくための催しなどを実施しました。

創立100周年記念式典・祝賀会

2023年6月10日(土)ホテルニューオータニ大阪にて記念式典と祝賀会を開催しました。
両小学校児童による合唱披露からはじまり、ご臨席の方々や関係者から祝いのことばをいただき、
舞台や演奏が会場を盛り上げました。

小学校児童による合唱

お祝いの演奏

能の祝舞

配布された式次第と記念品

西脇隆俊京都府知事の祝辞

創立100周年記念ミサ

2023年6月3日(土)カトリック伏見教会にて大塚喜直司教様司式のもと記念ミサを開催しました。

顕彰碑

聖母女学院発祥の地カトリック玉造教会(大阪)に顕彰碑を建てました。

第3部

時をかさね、築いてきたもの

かつて7人のシスター方からはじまった聖母の教育は
時代と共に幹を太くし、枝葉を大きく広げ、
現在において7つの学校・園へと結実しました。
ここではそれぞれの理念や具体的な教育をご紹介します。

香里ヌヴェール学院中学校・高等学校

Since 1923

紡ぎゆく学び
さらなる高みへ

100年後もあり続ける OBEISSANCE ET PURETEの意志

100年前、ヌヴェール愛徳修道会のシスターたちは、何を想い、この極東の地にやってきたのか。日々の教育活動を行うなかでしばしば思いを馳せることがあります。今年100周年を迎え、本校ではホームカミングデーを実施し、たくさんの卒業生が本校に戻ってくれました。また室内体操場であった場所が食堂（ルルドホール）に生まれ変わり、生徒たちが集い、会話を弾ませる場所になっています。ちなみに当時、生徒たちが手で磨いたナラの木のコートをそのまま使用し、リノベーションしております。ぜひ遊びに来てください。本校は、100年続く伝統を大切にしながらも、新たな時代に合った教育的取り組みを実践しています。2017年度に共学化して以来、ICT教育、グローバル教育、探究教育を軸に実践しています。その結果、この3年の間に海外進学者が20名以上輩出し、世界のトップ大学であるワシントン大学への進学者もいます。聖母の教育観を持った生徒が世界に向かっていく姿は、誇らしく、今後も大阪の地に本校があり続けるよう、努力し続けます。

香里ヌヴェール学院中学校・高等学校
学校長　池田 靖章

香里ヌヴェール学院中学校・高等学校の日々

1 ドローン同好会、e-sports同好会など多様な同好会を生徒が申請し、放課後の活動の幅が広がる。

2 清掃ボランティア・茶道・華道など、心の教育や伝統文化を継承。

3 国の登録有形文化財の指定を受けている格調高い校舎の一部が、食堂として生まれ変わる。

4 クラブ加入率は約75%。高校ダンス部全国出場、女子駅伝競走部近畿高校駅伝連続出場など、輝かしい結果を残す。友情の絆を深め、自主性や協調性を育む。

香里ヌヴェール学院中学校・高等学校の教育

探究学習

学校近くの都市型農園と提携して作物の栽培から販売までを体験する「グリーンラボ」、校内で駄菓子を販売してビジネスの付加価値について実践的に学ぶ企画。希望者を募って北海道の網走市へ行き、現地を探究して観光振興策を考案して市にプレゼンする「網走市ジュニア観光大使プロジェクト」など、中高生のうちに豊富に原体験となるような経験を積み重ね、後の人生に何らかの形で生きることを期待し、さまざまな活動を行っています。

グローバル教育

芸術科目を外国人教員と日本人教員のチームティーチングで行うイマージョン授業を通じて、言語だけでは身につかない生きたグローバル感覚を養います。またグローバルに戦わざるを得ない時代に備え、海外進学指導部を設立。意思決定の選択肢を広げ、自分で決定することを大切にしています。毎年6名前後が海外大学に進学。世界トップクラスのワシントン大学に入学者を輩出。

輩出した卒業生数（2023年3月まで/高校生）

11,434人

近年の進路（抜粋）

University of Washington／Monash University／国立中興大学／漢陽大学／Western Sydney University／東京大学／京都大学／大阪大学／神戸大学／名古屋大学／奈良女子大学／大阪府立大学／大阪市立大学／神戸市外国語大学 など

早稲田大学／上智大学／明治大学／関西大学／関西学院大学／同志社大学／立命館大学／立命館アジア太平洋大学／京都薬科大学／大阪医科薬科大学／関西医科大学／大阪歯科大学／同志社女子大学／京都女子大学／神戸女学院大学 など

香里ヌヴェール学院小学校

Since 1932

紡ぎゆく学び
さらなる高みへ

香里の丘の緑あふれる自然環境の中で、のびのびと学ぶ平和の天使

学校生活の1日は朝の祈りから始まります。祈りの言葉に「・・今日もみんなが元気で働けますように。神様、世界を平和にしてください。お互いに助けあえる広い心にしてください・・」という箇所があります。学校は単に知識を学ぶための場だけではなく、児童や保護者、教職員との関わりにおいて生きることを学ぶ場であり、世界的な視点で物事をとらえ、考え、行動できる力を育みます。
そして、恵まれた自然環境のもとで、カトリック精神に基づく確かな伝統の心、変わりない価値を基盤として、未来を切り開く思考力、世界とつながる国際理解力、豊かな心を育む情操教育を教育の柱とし、新しい教育のカタチの創造を続けていきます。
創立者が種を蒔かれた香里の地からは多くの平和の天使が巣立っています。卒業してもいつでも戻れる学び舎でありたいと思っています。

香里ヌヴェール学院小学校
学校長　東山 さゆり

香里ヌヴェール学院小学校の日々

1 PBL(Project Based Learning)学習
チームで協働しながら具体的な課題の解決方法を導き出していく実践型・参加型の学習方法を取り入れています。

2 ICT教育
iPadやChromebookを使い、ICT活用技術を習得し、これからの高度情報化社会に対応できる力を育成します。

3 聖堂
厳粛な祈りの場です。保護者の方にも参加いただく学年ミサや、宗教委員の子どもが中心となるロザリオの祈りを定期的に行っています。

4 合宿
「周りの人のために動いたり働いたりする」ことを合宿のねらいとし学年に応じた体験を重視したプログラムを組んでいます。生活技能の習得に始まり、合宿を通して社会とのつながりや平和の意味を考えます。

5 遊び場所
大運動場、小運動場、はだしの広場、木立の広場など子どもたちが自然に触れたり思いきり体を動かしたりできる遊び場が多数あります。

6 クリスマスセアンス
2年生、有志の5年生、合唱団が出演する聖劇による福音朗読です。聖歌は心の中に沁みとおります。

香里ヌヴェール学院小学校の教育

伝統と革新の3つの教育

真理の探究へのあゆみ

多様な価値観の中で平和を軸に問題意識を持つ力を育みます。具体的な課題の解決方法をチームで協働しながら導き出す探求型の学びを目指しています。

世界とつながるためのあゆみ

北米・アジア・オセアニアなど、多国籍の教員とともに活動する風景が日常となっている中で、気持ちを伝える英語力、異文化の中で自分を発見する喜び、未来を切り開く力を育んでいきます。

人々の心を結ぶためのあゆみ

協働力と生きる力を育むプログラムは、仲間の大切さを知ることになります。互いの良さを引き出し合い、知恵を出し合い、一人では超えられない壁を超えることができた経験は宝物となります。

特色ある2つのコース

スーパースタディズコース(SSC)

興味を学びに変え、総合的学力向上を目指します。週3時間の英語の授業、算数検定、漢字検定、社会とつながる体験授業や仮説検証を繰り返すプロジェクトに取り組みます。プレゼンテーションの機会も大切にしています。

スーパーイングリッシュコース(SEC)

英語を用いたグローバルな思考力を養います。英語運用力を測るために、年に2回TOEFL Primary/Juniorを受検することで自信をつけています。英語で自然にインプット・アウトプットができるよう力を高めています。

輩出した卒業生数

(2023年3月まで)

6,512人

沿革

1921年(大正10年)5月
　7人の修道女来任
1923年(大正12年)3月
　大阪市東区(当時)玉造に
　聖母女学院を創立
1932年(昭和7年)4月
　聖母女学院小学校開校
1988年(昭和63年)4月
　聖母女学院、男女共学とする
1991年(平成3年)4月
　校名を「大阪聖母学院小学校」
　とする
2017年(平成29年)4月
　校名を「香里ヌヴェール学院
　小学校」とする

京都聖母学院中学校・高等学校

Since 1949

紡ぎゆく学び
さらなる高みへ

真理を追い求め、深化の歩み続けながら、その先へ

創立100年の節目を迎えるにあたって、同窓生の方をはじめ、今日までご支援いただいたみなさまへの感謝の思いでいっぱいです。わたしたちと繋がっている多くの方々から賜った愛の深さ大きさが、この100年の歴史を作り上げていることを感じながら、学び舎で生徒たちと日々豊かな時間をいただいています。

聖母女学院の建学の精神のなかに「真理を探究し」ということばがあります。グローバル化が進み、多様な価値観であふれている現代社会において、よりいっそう輝きを放つ言葉となってきているように感じています。学校教育は、生徒たちの人生の土台をつくる役目を担っています。生徒たちが生きていく未来がどのように変化しても、たしかな歩みができるよう、変わることがない真理を追い求めることこそ、本学院の教育が貫いてきた姿勢です。これからも学院の学び舎で過ごす生徒たちとともに、さらに深化しながら真理を求める歩みを続けていきたいと願っています。

京都聖母学院中学校・高等学校
学校長　川口 恒久

京都聖母学院中学校・高等学校の日々

1 近年は、天候や熱中症の心配もない、大阪のドーム体育館で体育祭を行っています。

2 冷泉家の先生のご指導のもと、和歌の講座を行っています。日本語の情緒豊かな世界を学びます。

3 中学３年生の希望者には、イギリスケンブリッジ大学などで語学研修を行っています。

4 カトリックの精神を受け継ぎ、街頭での募金など、ボランティア活動にも取り組んでいます。

5 クリスマスミーティングは全校で聖歌を歌い、ご生誕をお祝いする大切な行事です。

6 日本の伝統文化に親しむよう、着物の着付け講座や日本舞踊の講座を行っています。

7 フラワーアレンジメントの実習でお花の美しい飾り方のコツを学びます。

京都聖母学院中学校・高等学校の教育

平和の天使への思いを継承

長年続いているインドボーイズタウンへの里親制度などを通し、社会貢献の心を育成。2016年に設立した看護系大学進学コースでは、医療分野で社会への奉仕を望む生徒が学び、巣立っています。

新時代のグローバル教育に挑戦

GSC(グローバルスタディーズコース)では、従来の英語教育の概念を変え、PBLを通して論理的な英語の思考を学びます。オンラインで海外の様々な分野の専門家から学ぶ探求学習も魅力のひとつです。

クラブ活動で個性を発揮

たくさんのクラブが個性を生かし楽しく活動。全国大会常連校となった中高新体操部をはじめ、全国で活躍するクラブが増えています。

輩出した卒業生数（2023年3月まで/高校生）

10,136人

近年の進路(抜粋)

京都大学／大阪大学／神戸大学／
大阪公立大学／京都府立大学／
京都府立医科大学／旭川医科大学／
滋賀医科大学／奈良県立医科大学／
お茶の水女子大学／奈良女子大学／滋賀大学／
京都市立芸術大学　など
慶應義塾大学／上智大学／同志社大学／
同志社女子大学／関西大学／関西学院大学／
立命館大学／京都産業大学／近畿大学／
龍谷大学／金沢医科大学／北里大学／
愛知医科大学／川崎医科大学／関西医科大学／
兵庫医科大学／大阪医科薬科大学／
大阪歯科大学／京都薬科大学／京都看護大学／
University of the Sunshine Coast　など

京都聖母学院小学校

Since 1949

紡ぎゆく学び
さらなる高みへ

はばたけ!平和の天使たち

世界的に大きな変化の中にある現代の子どもたちに必要とされている力とは。未来を創り上げ、生き抜いていく力とは、どのような力なのでしょうか。わくわくする未来は、一人ひとりの可能性を十分に伸ばし、心豊かに送ることができた先に、本校はあると考えています。またカトリックミッション校として「神に愛されている」ことを伝え、日々の教育活動や行事、生活を通して、「命の尊さ」「優しさ」「善い行い」「信頼し尊重しあう心」を学んでいます。子どもたちは未来を見すえて、「Traditional Values(伝統的な価値)× Future Skills(未来のスキル)」に磨きをかけながら、学びを存分に楽しんでいます。

京都聖母学院小学校
学校長　中島　正子

京都聖母学院小学校の日々

1 教師・児童に1人1台のタブレット端末が最先端の学び支えます。

2 中運動場。人工芝になってお天気の良い日は寝転ぶこともできます。

3 いつもたくさんの子どもでにぎわう本校自慢の図書館。

4 PEPEスポーツDay(運動会)はアリーナで開催しています。

5 全学年の力作が並ぶArt festival (図工作品展示会)。

京都聖母学院小学校の教育

未来を切り拓く2つのコース

総合フロンティアコース

多様に変化する時代や未来に柔軟に対応できる確かな学力をめざし、相互の考えを伝え合うコミュニケーション力を養います。

国際コース

教科を学ぶ言語は英語。日常的に英語に触れながら、実践的英語力と、自分の考えを相手に伝えられるコミュニケーション能力を育成します。

平和の天使(創立者の言葉)を育むための4つのプロジェクト

祈りに見出す

祈りに始まり祈りで終わる学校生活や、宗教合字を通して、子どもたちは神の存在を知り、信頼し、心を静かにして祈ること、感謝することを学びます。

いのちの輝き

「神さまに生かされている」ことを伝え、目に見えないものを大切にする心を育みます。校外合宿や学年ごとに行う宿泊合宿を通して、「命の輝き、大切さ、そして人々の温かさ」を実感していきます。

仲間と築く

さまざまな人との出会いや関わりの中で、お互いに心を磨き合える仲間を作ります。さらに、共に学び合う仲間の中で、自分が一人の人間として大切にされていると実感できる集団作りを進めています。

自ら学ぶ

社会の変化に対応する学力、周りの人と共に考える対話的な深い学びを進めます。また、まなびの連続と活用を意識し、社会で活きる教育を行います。

輩出した卒業生数

10,000人

2022年4月に入学した1年生が卒業する2028年3月に卒業生数が10,000人を超えます。

沿革

1949　京都聖母女学院設立
1957　男女共学制になる
1960　聖母学院小学校と改称
1980　小学校体育館竣工
1986　小学校新校舎竣工
1999　聖母学院小学校創立50周年
2000　「大聖年ミサと音楽の集い」開催
2003　国際コース開設
2006　学童保育室設置
2011　京都聖母学院小学校と改称
2014　給食「聖母ランチ」導入
2021　総合から総合フロンティアコースと改称
2023　100周年記念行事多数開催

京都聖母学院幼稚園

Since 1951

紡ぎゆく学び
さらなる高みへ

子どもたちの心を『大好き』でいっぱいに!

幼稚園では、子どもたち一人一人が大切にされていることを実感し、自分がかけがえのない唯一無二の存在だと気づくことができるよう保育を進めています。日々、溢れるほどの愛につつまれながら、「神さまが好き!」「自分が好き!」「友だちが好き!」「先生が好き!」など、自他共に慈しむ心を育んでまいります。また、幼稚園の3年間は、さまざまなことを敏感にとらえて吸収する時期です。その貴重な時期に、日常の保育をとおして、「かけっこが好き!」「歌が好き!」「お絵かきが好き!」など、自分の好きなものをいっぱい見つけていただきたいと考えています。子どもたちがたくさんの「大好き」を胸に、自分に自信をもって、強く、優しく、しなやかに、自身の持てる力を充分に発揮して「平和の天使」として歩んでいけるよう、保育に努めております。

京都聖母学院幼稚園
園長 寺井 朝子

京都聖母学院幼稚園の日々

1 「園庭遊び」「絵画制作」「フラワーアレンジメント」「書道」等、日々の保育で体験する一つ一つが、子どもたちの沢山の「大好き」を育てます。

2 運動会やクリスマス、みんなで力を合わせて何かをやり遂げる充実感と達成感は大きな自信に繋がっていきます。

3 沢山の人々に支えられて生かされていることを知り、勤労感謝の日には駅や交番の方々に感謝の気持ちを伝えに出かけます。地域の方々との関わりを大切にしています。

4 満3歳児クラス・未就園児保育(アンファン・ファミーユクラス)
温かい家庭のような雰囲気の中、先生や友達と一緒に過ごし、園に慣れ親しみます。(満3歳児クラスは在園児扱いとなり、保育料も無償化となっております)

京都聖母学院幼稚園の教育

遊ぶ

遊ぶことは「今」その瞬間に向き合うこと。自分で触れて感じて考えること。友だちと一緒に笑ったり、時には思いが交錯したりする。そこには一人一人の世界観があり、それを見つけたり、繋いだり、広げたりできる。私たちはそのような保育を目指しています。

祈る

「神さまが好き!」「自分が好き!」「お友だちが好き!」と思える子は、自分や周りの人や物を大切にできる子です。世界にたった一人だけの私を創造してくださった神さまの愛に応えられますように。自分のことだけでなく他の誰かの希望や光となれますように。

輩出した園児数 (2023年3月まで)

7,692人

夢中になる

「エッセイズ※」では、指先を充分に使い脳を刺激し、器用さと集中力を身につけます。自分で選び、繰り返す作業を通して、対象物や自分自身と向き合うことで達成感や満足感を味わいます。

※「エッセイズ」とは、モンテッソーリ教育の教材や教具などを使った本園独自の取り組みで、「試行錯誤する」という意味の造語です。

聖母インターナショナルプリスクール

Since 2018

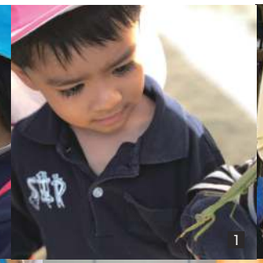
紡ぎゆく学び
さらなる高みへ

Curiosity, the gift all kids have
～好奇心、すべての子どもが与えられた才能～

いつも賑やかな声が響き渡る聖母インターナショナルプリスクールでは、子ども達は英語を使ったダンスやアート、体操に音楽、ヨガと様々な活動を通し、全身で表現する“I love you”が溢れる毎日を過ごします。幼い時期は人と人とが触れ合うことの大切さを感得するためにかけがえのないものであると認識し、国籍年齢性別の異なる私達職員はたまらなくいとおしい子ども達と共に楽しみ愛を伝え合います。
こうした暮らしの中で子ども達は自他の存在をはっきりと意識するようになります。「自分がしてほしいと思うことは何でも人にしなさい」というカトリックの黄金律が日常の言動を通して実践できるように、相手のおもいを受け入れあたたかい手が差し伸べられる思いやりの心を育むことに努めています。
子ども達の自己肯定感を育むことこそ大切と考え、感情のすべてを受け止め、その先へ自ずと一歩を踏み出す好奇心や意欲を培う保育に力を尽くしています。

聖母インターナショナルプリスクール
園長　迫田 薫

聖母インターナショナルプリスクールの日々



1 キャンパスには、不思議に思うこと、新しい発見がいっぱい！
2 登降園時、食前食後にはお祈りを捧げます。
3 生まれ育つ日本の季節や風習に多角的に触れ、知ることの楽しさを体得します。
4 ダンスに体操、外遊び、SIPの子ども達は身体を使うのが大好き。
5 職業、世界、身体のしくみ、数、図形、季節…遊びを通して学ぶ毎日。

聖母インターナショナルプリスクールの教育

Express Yourself

まだ感情という概念のない幼い子ども達が、気持ちや思いがあることに気づきます。それらを表現してほしい、お友達にも同じく気持ちがあることを理解し、互いに寄り添える思いやりを持った人に育ってほしいと願い保育をしています。

Art Time

筆、鉛筆、スポンジ、刷毛にローラー、絵具、オイルパステル、マーカー等を様々に組み合わせ、描く・塗る・ちぎる・切る・貼るなど多様な手法で、個性溢れる作品を完成させます。

ICT教育

ログインした後の事柄はすべて自分の責任であると、全員に異なるIDを用意し、ICT教育の入り口となるChromebookを用いた活動。必要な時期には在園児や集う機会を失った未就園児を対象にオンライン保育を実施しました。

輩出した園児数 （2023年3月まで）

66人

日本文化

生まれ育つ国のことをきちんと知ってほしいと、全員で行う毎月の集会で、日本の行事や文化を紹介します。その月の祝日や伝統行事、四季に恵まれた国ならではの季節の花々や旬の食べ物に触れます。

京都聖母学院保育園

Since 2018

紡ぎゆく学び
さらなる高みへ

「子どもが、まん中」の保育園を目指して

子どもには自分で自分を伸ばす力が一人ひとりに与えられています。モンテッソーリの思想のもと、唯一無二のユニークな存在である個々の子どもに応じたカリキュラムを用意し、自分で選び判断して問題を解決していける力を育てています。「一人でできた！」という体験は自尊感情を育み、そのできることで人と関わろうとしていきます。やがて「誰かのために働くことって素敵だな！」と感じられる子どもを育てたいと願っています。そのために3歳のクラスからは、3歳、4歳、5歳の縦割りクラス（混合クラス）を基本のクラスにしています。同じ活動であっても「見て学び教えてもらって学ぶ時期」「自分ひとりでやってみながら学ぶ時期」「教えてあげることで学ぶ時期」の三つの学びを体験しながら、思いやりの心を育てます。さらに地域の方々とのふれあいの活動を通して、地域への愛着の心や感謝の心も育んでいきます。

京都聖母学院保育園
園長　赤野 孝一

京都聖母学院保育園の日々

京都聖母学院保育園の教育

個が輝く豊かな人間性を育む保育

神様からいただいた発達の過程を大切にし、子どもたちを観察しながら、一人ひとりに応じたカリキュラムを作ります。主体的に「一人でできる」ように適切な関わりをしていきます。

生きる力を育むモンテッソーリ教育

子どもたちの「ひとりでするのを手伝ってね」という心の声に寄り添い、子どもの自立、生きる力を育むお手伝いをしていきます。

縦割り保育で思いやりの心を育てる

年少児から「縦割り保育」を取り入れています。3歳、4歳、5歳児が同じクラスの中で学びあい、助け合いながら、互いを思いやる優しい心を育てていきます。

輩出した園児数　（2023年3月まで）

48人

地域への愛着と人とつながる力の育成

地域の方々との様々なふれあいを通し、地域への愛着の心を育て、人とつながり、地域社会に自ら貢献できる社会性を育てていきます。

世代を超えた座談会

つながる聖母女学院 Stories

37回生　谷村慶子様 谷村医療器株式会社
50回生　中川恵子様 元吹田税務署長
72回生　松浦恭子様 養護教諭
1995年卒 伊達康一様 第一プラスチック株式会社
1995年卒 大谷啓太様 大谷デンキ
88回生　鎌田美潮様 大阪医科薬科大 研修医
95回生　東野楓叶様 大阪電気通信大 総合情報学部

左から　松浦さん、大谷さん、伊達さん、谷村さん、鎌田さん、中川さん、東野さん

第1部 香里キャンパス編

意思をもって生きる強さを教えてくれた聖母の日々

まずは世代の異なる皆さんに、それぞれの在学中の思い出をお話しいただきたいと思います。

谷村　今日集まったメンバーの中では私が一番年上ですね。私の頃、聖母は男子禁制で、親・兄弟も立ち入ることができませんでした。校則も厳しかったと思います。みんな三つ編みをしていて、私たち大正時代の女学生みたいだねって言ってました。

中川　まさに「女の園」でしたね。異性の目がないから夏の暑い日に冷たい石の床にべったり座っていたのも、なつかしい…。

谷村　制服が暑かったから仕方ないね（笑）。楽しかったことは学芸会です。みんながそれぞれ得意なことや興味のあることを練習してきて発表するんです。ある人はピアノを弾いたり、ある人は友だちを募ってコーラスをしたり。私は友だちに時代劇のお芝居をやろうと誘われて、人を切る侍の役を演じました。慣れないことでしたが観客の評判は結構良かったですよ。いまでもそういう学芸会は行われているんですか。

東野　いまは文化祭になっています。先輩の頃のように好きなことを自由に発表するのではなく、演劇部やダンス部、軽音楽部などが部活動の成果を発表する場になっています。私は2021年まで高校の生徒会執行部に所属していて、そうしたイベントを運営する側として頑張っていました。

松浦　私の思い出は合唱コンクールです。楽しかったなぁ。

鎌田　朝早く集まって練習して、放課後もまた練習して…。みんなで一つのものを作り上げるって大変だけど、心に残りますね。私のクラスは最優秀賞をとったのでいい思い出になりました。みんな真剣だからケンカもするし、泣いたりもするけど、それがいいんだよね。

中川　皆さんのような特別なイベントではないけれど、私はお御堂に入って御ミサに参加したときのことをよく覚えています。神聖な場所に入ることで味わった敬虔な気持ちが、いまもありありとよみがえってきます。最近では美術展などのイベント時にお御堂が会場として利用されているらしく、先日学校に来たときにみんながぞろぞろと入っていくのを見て、私たちの頃と随分変わったなと驚きました。

東野　いまでも段の上に上がってはいけないなど、神聖な場所としてのきまりはもちろんあるのですが、少し変わってきているのかもしれませんね。

大谷　私が入学したのは共学化してから3年目です。小学校に通いましたが、みんなで学校に泊まる合宿が楽しかったです。友だちと同じ場所で一緒に寝るのもワクワクしました。朝起きると自分だけ離れた床の上に寝ていて恥ずかしい思いをしましたが…（笑）。

伊達　私も大谷さんと同じ小学校卒業生です。5・6年生の頃、クリスマスの時期にみんなで松坂屋に行って大勢の人たちの前で聖歌を歌っていたことが印象深いです。

谷村　そういえば3年ほど前に枚方市の病院に入院しましたが、そのときに聖母の学生たちが歌を歌いに来てくれていましたね。私も部屋着のまま聞きにいきましたが、子どもたちの聖歌が聞こえてくるというのはいいものだなとしみじみ思いましたよ。

カトリックの学校で学んだことは皆さんにとってどんな影響がありましたか。

谷村　週に一回、宗教について学ぶ授業がありましたが、私は正直に言えばあまり好きではありませんでした。聖書に書いてある超自然的な記述はなんだか納得できませんでしたし。でもその後大学で外国文学を学ぶようになると、ヨーロッパの人たちの考えの根底にキリスト教の精神が深く根付いていることがわかり、聖母で学んできたおかげで、海外文学の深みを読み解くことができました。

大谷　私は先生からよく「マリア様が見ていますよ」と言われて育ったため、卒業した後も、誰も周りにいなくてもマリア様が見ているんだと考えて、悪いことはできなかったですね。

松浦　私が在学していた頃、シスターがタイに訪問して慈善活動をされていました。その活動に同行して見学できる機会が

あると聞いたとき、私は絶対に行きたいと思い、名乗りを上げたんです。現地で貧しい子どもたちにシスターが手を差し伸べている姿を見て心から感動しましたし、そのとき心に芽生えたものが、大人になってから、小学校の養護教諭として働く職業選択につながりました。

鎌田　私もタイを訪問するスタディツアーに参加しました。Tシャツなど現地の人に喜ばれそうな物資をできるだけたくさんトランクに詰めて、自分の荷物は最小限に抑えて。バンコクからかなり離れた地域まで行きましたね。そこで親、兄弟を養うために働かなければならない子どもたちを目の当たりにして、自分がいかに恵まれているのかを知って衝撃を受けました。こういう経験は聖母でなければできなかったと思います。

聖母の先生たちとの関わりは
どのようなものでしたか。

中川　私たちの頃って、親や先生の言うことは絶対だという時代だったと思うのですが、そんな中にあっても聖母の先生方は、言いたいことを自由に言っていいという雰囲気をつくってくださっていました。だから私たちは自分の意見を自由に言えたし、行動もできた。そのおかげで友だちとの団結も深まったのだと思います。

谷村　確かに先生と生徒の関係はいまより厳格でしたが、それでもどこか打ち解けていたのかな。いたずらもよくしていましたね。あるときクラスの名簿の名前を勝手に書き換えて、ものすごく怒られたことがありました(笑)。

伊達　思い出すのは担任の先生のことです。私は小学校の頃勉強があまりできなくて。友だちは大抵中学受験して私学に進む選択をしていたため、親もどうするべきかと結構悩んだようです。そんなとき担任の先生がしっかり私と親に向き合ってくれ、真剣に進路について話し合ってくれました。そのおかげで私は納得して公立中学校を選択できたので、一人ひとりを大切にしてくださる学校だなという印象があります。

東野　私は2019年の入学のため、在学期間中の活動がコロナ禍で大幅に制限されました。生徒会執行部に所属していた私たちはそんな環境に負けず、なんとか文化祭を開催しようとみんなでやり方を話し合い、結果的に毎年実現していたのですが、ほかの学校からみればこれはなかなかできないことですよね。私たちがこんな大胆な挑戦をできたのも、先生たちが私たちを信じて見守ってくださったこと、そして一緒になって努力してくださったからだと感謝しています。学校としてはリスクを減らしたいはずなのに、よくゴーサインを出してくださったなと思います。ほかにもいろいろなチャレンジをしましたが、それも先生方が私たちの挑戦を応援してくださったからです。

卒業してから聖母で学んで良かったと
思ったことはありますか。

谷村　やっぱりいいお友だちに出会えたことです。12年間も一緒だったんだから、大学で出会った友だちより強い信頼関係があります。ケンカとかしたことないですね。なにかあっても、「あの人がそんなことをするはずがない」と信じられます。

中川　私も聖母の友だちのありがたさは常に感じています。つい先日も同級生と集まっていたんですが、もう私たち親戚みたいな関係だねって話していました。聖母の友だちは生活のリズム感が同じだから一緒にいてラクなんです。
あとは、おとなしい性格だった私がどんどん挑戦できるようになったのは、聖母でチャレンジする機会をたくさん与えていただいたからだと思っています。社会に出て驚いたのは、新しい役割を任されるような場面で女性がすっと引いてしまうことがあるんですよね。私はそういうとき、臆せずに踏み込むことができましたから、そのおかげで充実した人生を過ごしてこられたと思います。

大谷　私は聖母で育ったおかげで、このとおり品の良さを身につけられました(笑)。

鎌田　私は先ほどお話ししたタイのスタディツアーや釜ヶ崎のボランティアに参加した経験などから、人を助ける力になりたいという自分の軸を持つことができました。私が自発的に歩みはじめた人生のストーリーは聖母からはじまったと思って感謝しています。

松浦　私もそうですね。聖母ではこういう場面であなたはどう感じますか、どう考えますか、と問われる機会がたくさんありました。例えば、戦争中などの過酷な場面の写真を見て、自分がこのカメラマンだったらどう行動するのかと考えたり。そういう問いに対して自分で考え、いろいろな体験を通して視野を広げたことで私も自分の生き方を見つけられたと思います。

皆さん、いろいろなお話をありがとうございました。
それでは最後に、これからの聖母、
すなわち香里ヌヴェール学院に
どんな期待をされていますか。

谷村　名前は変わりましたが、これからも150年、200年と続く学校であってほしいです。

伊達　いまは本当に大変な世の中だと思います。これからを生きていく人には、強さが必要。小さい頃から自分で考え、生きていく力を育む教育機関でいてほしいと思っています。

中川　私は社会の時間に租税教室を担当させてもらっている縁で、いまもこの学校に来ることがあります。そのとき先生方が話されていることをお聞きしていると、「失敗してもいいんだ、だから行動してみよう」と生徒に呼びかけていらっしゃるように見え、それが本当に素晴らしいことだなと思います。今後もそうあり続けてほしいです。

松浦　一般的に学校に通う子どもたちは「みんなちがって、みんないい」と言われて育ちますが、先生はそうじゃないんですよね。教育現場には暗黙のルールみたいなものがあって、そこから外れることはご法度です。でも思い返せば、聖母の先生たちは、すごく自由で個性的で、魅力的な方々が多かったと私は記憶しています。今後も先生方に個性を発揮して頑張っていただきたいです。

鎌田　「さすが聖母の卒業生だね」と言われるような人が、どんどん出てきて社会で活躍してほしいと願っています。自己肯定感を育んでくださる聖母ならそれができるはず。私も卒業生の一人として頑張ります!

東野　生徒会を見ていると、私が卒業した後も、また新しいことにどんどん挑戦しているようで頼もしく感じています。先生も一緒になって、もっといけいけ、というムードがさらに盛り上がっていくといいですね。期待しています。

左から　松苗さん、髙島さん、吉田さん、米津さん、越知さん、山本さん

1回生　米津千鶴子様（旧姓：澤）元聖母学院中・高 家庭科教員、元同窓会長
13回生 越知滋子様（旧姓：大塚）元聖母学院小学校教員
38回生 髙島さや香様 学校法人聖母女学院 職員
46回生 山本晃嗣様 株式会社山本本家 専務取締役
53回生 吉田拓馬様 京都府立医科大学北部医療センター 副医長・京都府立医科大学 助教
67回生 松苗弥音様 京都市立芸術大学 美術学部デザイン科

第2部
藤森キャンパス編

私たちを育んでくれたのは、包み込むような聖母の愛情

今日はさまざまな年代のご卒業生にお集まりいただきました。皆さんの在学当時のキャンパスはどのような様子でしたか。

米津　私は藤森の聖母女学院の中学1年として1949年に入学しました。ここは陸軍の師団司令部だった所ですから、開校当時には教育設備は整っていませんし、本館は黒く塗られているし、雑草は伸び放題…。
大変な状況でしたね。でも私たちはそれで特に不自由に思わず、自然に恵まれた環境の新しい学校で伸び伸びと学校生活を楽しみました。講堂兼体育館の壁が粗末な素材でボールが当たると穴が空いたりしましたが、クリスマス前にマ・メールがそこに緑の艶紙をツリーの形に貼ってくださり、楽しかったことを覚えています。

越知　私は13回生です。私の入学時に本部校舎はすでに美しい赤レンガになっており、在学中にもどんどん建て替えや新築が進みました。小学校3年生のときに新しい校舎が建ちましたし、中学生の頃にみんなが「鶯張り」と呼んでいた廊下がギコギコ鳴る古い校舎も、高校の頃には新築に建て替えられました。そのほかプールも新しくできたし、遊び場になっていた防空壕はいつの間にか姿を消しました。

髙島　越知さんの頃が、キャンパスが一番変わった時期なのかもしれませんね。38回生の私の頃には、もういまとほぼ変わらないキャンパスになっていました。

吉田　その後のキャンパスは少なくとも幼稚園、小学校、本館はあまり変わってないのかもしれません。小学校の時にいつも見ていた本館はいまも赤レンガで立派な姿はそのままです。今日は20歳・大学2回生のときに「成人のつどい」（現・「二十歳のつどい」）で小学校を訪れたとき以来ですが、小学校のときと同じ空気と雰囲気に温もりを感じています。

カトリックの学校に通うことに、どんな印象を受けていましたか。

吉田　やはりシスターが園長先生、校長先生というカトリックの学校ということでほかの学校とは違う校風と雰囲気があったと思います。朝早くに学校に行き、お祈りに行くと石田先生がマリア様の綺麗な「御絵」をくださってうれしかったですし、学校でロザリオを買ったこともありました。母の手作りの手編みの小さな袋に入れたマリア様を校章のバッジの横に付けていて、その小さな袋をつけることに子ども心ながら誇りを持っていたことは思い出深いです。母も聖母の22回生ですので同じ学校に通っているという安心感もありました。

越知　私が小学校低学年の頃「めでたしの祈り」をフランス語で歌っていました。そういう宗教的な体験はほかの学校にはない特別なものだったと思います。また、その頃はまだ創立者のレヴェランド・メールがときどき学校に来てくださっており、厳かにお話された内容を菅野マ・メールが美しい日本語に翻訳してくださいました。そんな時間も私にとっては非常に印象的でした。

山本　小学校在学中は特別なことをしている意識は全くありませんでしたが、同志社香里中学校に進んでほかの学校から来た仲間と一緒になったとき、聖歌がすっかり自分の体に染み込んでいることに気がついて、聖母学院で教育を受けてきたことを実感しました。

米津　私たちの頃は沈黙の大切さをよく教えられました。教室で先生を待つ間とか自習の時間に沈黙が守れなくてよく叱られたものです。またマ・メールのお祝いの日には「霊的花束」を贈りました。これは、その方のためにお祈りや犠牲を捧げた回数を花束としてカードに書いて贈るのです。無駄なおしゃべりを我慢して沈黙を守ることは私たちの犠牲にぴったりでした。このような宗教的なおこないを通じて、自分と同じように他の人をも大切に想い、祈りやこころで繋がることを教わっていたのでしょうね。

皆さんにとって印象深い聖母の思い出は何ですか。

米津　最初の秋の運動会は香里と合同でということで、香里の運動会に参加したのですが香里の立派な校舎や行庭にたくさんの生徒に飲みこまれてしまった私たちは運動会を楽しめませんでした。翌日直ぐに藤森で自分たちの運動会をやりたいとの声が上がり、先生方のご理解を得て、体育委員を中心に全く生徒の手作りの運動会ができました。小学1年生の参加もあり3週間程の放課後の練習で盛沢山なプログラムの運動会で1日盛り上がりました。

越知　生徒の意見を尊重する学校だったという点が大きいのでしょうね。聖母学院在学中は常に、自分の意見をはっきり述べるよう求められたことを覚えています。女性は控えめに

することが時代の価値観でしたから、いまから思えば、時代の少し先をいく教育だったのではないでしょうか。私たち13回生が制服を変えてほしいという意見を校長先生に直談判に行ったこともありました。この提案は結局認めてはもらえませんでしたが(笑)。

松苗　いまでこそ女性が意見を言うことは普通になってきましたが、聖母では以前から当たり前だったんですね。

越知　そうですね。例えば料理をする際にも、手順を覚えるだけではなく、なぜそのようになるのかという部分にも好奇心を持ち、考えなさいと言われました。聖母の掲げる「従順と純潔」は真理に対して従順であれという意味で、考えないとか、自分の意見を持たないということではないんです。

米津　そういう自分で考えるという教育を受けてきたからこそ、卒業後はいろいろな分野に進んで挑戦されている人が多いのかもしれませんね。

髙島　先ほど体育祭のお話があったのですが、私も体育祭に思い出があります。私たち38回生は中学3年生のときに応援合戦にはじめてマスゲームを取り入れ、猛練習の末に高校生の先輩たちを破って応援合戦で優勝することができました。夏場にジャージを着込むのでものすごく暑いし、動きを揃えるのは本当に大変でしたが、あの充実した日々は忘れられません。

松苗　私の母も38回生なので、その話は聞いたことがあります！そして先輩たちからはじまったマスゲームは応援合戦の伝統として受け継がれていたんですよ。

山本　皆さん方のお話を聞いていると、みんなで団結してイベントで盛り上がることも聖母学院の一つの特徴なのかもしれませんね。でも考えてみると学年対抗の体育祭というのは、ちょっと変わっていますね。体が成長している高学年が有利なはずなのに…。

越知　必ずしもそうとは限りませんよ。自慢みたいになりますが、私たち13回生は負けず嫌いのメンバーが揃っていたおかげで、中学1年から高校3年までどの年も1位を獲得したんです。

吉田　私は運動会というと、入場行進の鼓笛隊の行進で大太鼓を任されて行進の最前列を歩いたことを覚えています。男子はクラスで一番背が高いと大太鼓の役になれるので男子は皆、運動会が近づくと大太鼓に選ばれるかどうかソワソワしていました。
それから、幼稚園の卒園式の後で園長先生のシスター井上が特別に園庭で遊ばせてくださったことが私の良い思い出です。幼稚園に来る最後の日に、時間の制限なく、友だちと思う存分遊ばせてくださったときのシスター井上の笑顔は本当に優しかったです。その時、シスターは私たちを抱きしめてくださり一緒に写真を撮りました。
また、小学校に毎朝、登校したら校長先生のシスター真隅がみんなをひょうたん池の前で迎えてくださり、毎日毎日、シスターと「今日は元気ですか?」「はい、元気です！」と話し握手して教室に行きました。シスターは毎朝僕たちの手を握り、顔を見て、変わりないか、元気か、熱を出していないかなどを見ていてくださっていたのです。シスター真隅の深い愛情だったと思います。そういう愛情を知ったことはその後の私の人生と人格に大きな影響があったと思います。いまでもシスターの朝のお出迎えのことは忘れられません。

クラスメイトや先生と触れ合う中で どのようなことを感じていましたか。

髙島　私は実は人付き合いが得意な方ではなく、一人で過ごす時間も必要だったのですが、聖母学院にはそんな私を認めてくれる雰囲気がありました。普段グループから外れているとイベント時に一人ぼっちになったりしそうですが、合唱コンクールの練習や遠足などのイベントになると誰かが誘ってくれ、私もみんなと一緒にワイワイ楽しむことができました。

山本　先生の言葉をいまもときどき思い出すことがあります。私は楽しみにしていた体育祭の直前に骨折したことがありました。競技に参加できないため、先生に頼まれて運営本部の音響を手伝うことになったんですよ。チームに貢献できないことですっかり落ち込んでいましたが、終わった後に先生から「あなたの音響のおかげで、今日の体育祭はできたんだよ」と言われ少しでも人の役にたてたのかなと思い直すことができました。そのように気づかせてもらったことに、いまも感謝しています。

松苗　小学校のときの出来事が忘れられません。私は絵を描いたり、モノを作ったりするのが好きで、あるとき一生懸命自分で手作りした本を先生に見せたのですが、そうしたら先生はすごく喜んでくれて、家で私の本に合う「帯」を作ってきてくださったんです。好きなものに打ち込んでいる私の熱量をちゃんと見ていて、それに応えるように精一杯応援してくださる。そのことに感動しましたし、自分もほかの人にそうありたいと思いました。

いろいろなお話をありがとうございます。 皆さんは聖母女学院の教育とは どのようなものだと思いますか。

米津　いまの皆さんのお話を聞いていても思いましたが、聖母学院の教育とは“愛”に尽きると思います。私も教員を務めた経験があるのでわかりますが、先生が生徒たちに100%の愛を注ぐことは簡単ではありません。シスター方はキリスト教に根ざす深い愛でいつも私たちを包んでくださり、だからこそ安心して過ごすことができたのだと思うのです。

越知　しっかり愛されて育ったからこそ、一人ひとりの卒業生が感謝を知っている。聖母学院にはそういう面がありますね。奇しくも今年、かつての教え子たちが還暦同窓会を開き、私も3年生の担任として招かれました。各々がいまの自分を誇ったり、なし得たことを自慢するのではなく、いまあることを喜び合う姿に、本当にいい大人に成長したなと、とても清々しい気持ちになりました。そして会の最後にプリントが配られたのですが、見るとそれが聖歌の楽譜です。集まったメンバーのほとんどは信者ではありませんが、こういうときに神様に感謝する歌をみんなで歌おうというのは、生かされている自分をちゃんと認識しているということですね。これは本当に素晴らしいこと。感動してしまいました。

山本　私も同感です。聖母学院同窓会の総会の丁度学校法人聖母女学院100周年記念総会の年が学年幹事にあたり、そのときに集まった仲間たちが数十年ぶりの再会にもかかわらず皆自然と役割を分担して仲間を思いやって行動しているのを見て同じことを感じました。

吉田　みんなが愛されていると感じているからこそ、仲間と助け合ったりできるんですね。私も「愛すること、愛されること」ということをこの学校で教えていただいたので、それが今の医師という仕事で、人の役に立つ人間になろうという気持ちに繋がったと大いに思っています。また進学した中学・高校でも、大学でも、病院でも聖母の卒業生にたくさん出会いました。そして、中高、大学であっても社会に出ても、やはり「聖母の子」は何か共通する心があり、すぐに打ち解けて言葉に出さなくても理解し合える安心感は素晴らしいと思っています。

松苗　その安心感が、見返りを求めずにサッと手を差し伸べる行為につながるのだと思います。誰かを助けるのに理由は要りません。その人が救われると、そのことによって自分が幸せになれる。だから自然に手を差し伸べられる。聖母学院の卒業生は芯の部分にそういう強さを持っている気がします。

髙島　そうそう。私のクラスメイトが多様性を認めてくれたというのも、ちゃんと一人ひとりが愛されているという安心感があってこそだと思うんですよね。

これから聖母女学院には どんな教育を期待したいですか。

米津　いまは本当に不安な時代。これから世の中がどうなっていくのかが見えません。戦争が勃発したり、未知のウイルスが流行したり。何が起こるかわからない厳しい社会の中で、人は強く生きていかなければなりません。そういう中で教育がどうあるべきかと考えると、みんなが同じことを学び、同じ方向に向かっていけばいいという時代ではありませんね。私が聖母学院に期待したいのは、これまでと同じですが、「愛をもって、誠実に」ということかな。生徒たちに愛が注がれることで、安心してじっくりと自分で考えることができ、時代の変化を恐れることなく、勇気を持って進んでいくことができる、そんな人を育む教育の場であってほしいと思います。関係者の皆さま、どうかよろしくお願いいたします。

卒業生メッセージ

片桐 仁美

聖母女学院高等学校卒業。大阪音楽大学卒業。ウィーン国立音楽大学を最優秀で卒業。年間最優秀卒業生に与えられる文部大臣賞受賞。
ウィーン国立歌劇場におけるワーグナー『ワルキューレ』のジークルーネ役でヨーロッパデビュー、1988年にはバイロイト音楽祭のソリストに抜擢される。バイロイトでのレヴァイン、シノポリ、バレンボイムとの共演がきっかけとなり、シカゴ交響楽団やベルリン・ドイツオペラ、メトロポリタン等、世界のメジャーな舞台に出演する。
1997年に帰国。活動の場を日本に移し、堺シティオペラで『カルメン』タイトルロール、NHK響『第九』、新国立劇場『サロメ』他、オペラやコンサートに多く出演。リサイタルを大阪、東京、和歌山、広島、沖縄で開催。
和歌山県文化奨励賞受賞。公益社団法人関西二期会常任理事。元沖縄県立芸術大学教授。

聖母がくれた幸せな運命

私は小学校から高等学校まで、聖母女学院で学びました。

小学校4年生からフランス語の授業があり、フランス語での挨拶や童謡を習いましたが、同時にメール・アニエスから個人レッスンも受けておりました。

今でも悔やまれるのは、どうして中学校から英語を選択してフランス語をやめてしまったのか、ということです。

たいして出来たわけでもないフランス語ですのに、英語に切り替えることができず、中学1年生から英語の迷路に迷い込んでしまいました。

そのまま高校生になり、1年生の時にこの英語の成績ではまともな大学には行けないという現実に直面しました。

私は国語や歴史が好きでしたので、文系の大学に行こうと考えていました。それが無理となると、残るは理数系ですが、こちらはもっと無理です。そこで考えたのが実技系でした。

ピアノは下手でしたが続けていましたので、楽譜を読むことができました。しかしピアノ科は全く問題外なのは自分でもわかります。他の楽器は触ったこともないので、今から勉強するなら声楽しかないな、と考えました。担任の先生にも勧めていただきました。たまたま昔ピアノを購入した方の奥様が声楽の先生ということを母が知っていて、連絡を取ってくれました。

声を聴いていただき、「短大は大丈夫だと思いますが、あわよくば4年制大学も」と言われました。その先生は音大受験の教室を経営しておられて、先生自身はお時間がないが、大学院を出たところの優秀な講師の先生がおられると紹介していただいたのが、現在堺シティオペラを主宰しておられる坂口茉里先生でした。

先生の指導の下、大阪音楽大学に首席で入学しました。先生と先生のご主人は歌だけではなく、外国のオペラに関するお話をたくさん聞かせてくださり、大学卒業後は留学を強く勧めてくださいました。

お言葉の通りにウィーン国立音楽大学に留学、こちらも一番の成績で入学、年間最優秀卒業生の表彰を受けて卒業しました。

その後はウィーン国立歌劇場でオペラデビュー、オペラやコンサートで世界中に歌いに行かせていただきました。

聖母に行って良かったのは、カトリックのごミサを受けていたことです。声楽は主にオペラと歌曲と宗教曲の三要素があります。宗教曲はミサ曲が多くあり、ラテン語で書かれていますが、内容を知っているというのは本当にありがたいでした。

また、オペラも歌曲にも聖書が題材の作品がたくさんあり、それらになじめたのは聖母での経験があったからです。

また、外国語の発音も聖母で外国人の先生方に接していたおかげで、あまり苦労しませんでした。

海外での活動を終えて帰国の後は、歌を続けながら、後進の指導に当たっております。

高校の時にたまたま始めた声楽が私に豊かな人生を与えてくれました。余談ですが、現在は英語をかなり話せます。今くらい英語ができたならば声楽には出会えなかったということで、強く運命を感じております。

翼 和希

大阪聖母女学院中高卒。2013年4月、OSK日本歌劇団入団、日生劇場「レビュー春のおどり」で初舞台を踏む。18年4月、道頓堀角座「Revue Japan」で初主演。劇団創立100周年の22年は2月・3月、大阪松竹座・新橋演舞場「レビュー春のおどり」、7月、京都南座「レビュー in Kyoto」で主要メンバーとして活躍。10～11月、第42回「たけふレビュー」で大劇場公演初主演を果たす。同作に一部改作を加えて出身地の枚方で11月に再演し、23年8月には枚方市のPR大使に就任した。同月、近鉄アート館「へぼ侍」で主演。“へぼ侍”と呼ばれる主人公・志方錬一郎を熱演し、これまでにない作風でOSKの新境地を見せた。その好評を得て、2024年1月・2月に大阪・東京で再演。2～3月は全国4か所で「翼和希コンサート」を開催し、6月には「翼和希レビューショーin金沢」で主演。2023年度後期連続テレビ小説「ブギウギ」に主人公の先輩役で出演。

今の自分をつくった聖母での尊い日々

香里ヌヴェール学院中学校・高等学校創立100周年おめでとうございます。

聖母で過ごした中学、高校生活は私の人生においてたくさんのきっかけをいただけた時間でした。あの時間がなければ今の私はありません。

スポーツが大好きで部活のバレーボールに打ち込んだ中学生活は毎日が楽しく、仲間と一緒に何かをやり遂げる達成感や充実感を得ました。演劇部の姉の影響で知った歌劇の世界、歌劇を目指したことを心から応援し支えてくださった先生方、そして同級生。自分の決めた目標を皆さんが後押ししてくださる環境が今思うととってもありがたく尊いものだったのだと実感しております。

思い出は沢山ありますが…まず小学校から聖母っ子だったので内部進学でどこか心に余裕を持っていた私は、中学受験の日に雪が降り、昼休憩の時に同級生と庭で雪合戦や鬼ごっこをして、先生にしこたま怒られたことは今でも鮮明に覚えております。本当に反省しております。先生ごめんなさい。

本気で勝ちにいくためにみんなで作戦を練った体育祭、何度も何度も練習を重ねて本番に挑んだ音楽祭、クリスマスに盛大に行われるクリスマスセアンス、イベントだけではなくお昼に机をくっつけてみんなで食べるお昼ご飯などちょっとしたことを思い出すだけでも心が温かくなります。

豊かな心を育める開放的な環境だったからこそ何か一生懸命になれることを見つけ、追いかけることができました。今私がOSK日本歌劇団で頑張れているのも聖母で過ごした日々があるからだと思います。

今私はOSKで男役「翼和希」として活動させていただいております。

夢をお届けするお仕事は華やかで煌びやかな世界ですがそこに行き着くまではお稽古、お稽古、お稽古。人に感動や何か力をお届けすることは生半可なエネルギーではできないことを知りました。悩むことや苦しく思うことももちろんありますが、全ては劇場へ足をお運びくださる皆さまへお届けするため。先生方、スタッフの方々、出演者みんなの「全力」を詰め込んでお稽古に励みます。

稽古期間を経て、本番いざお客さまの前でご披露し、笑顔を見て、拍手をいただけた時、

「ああ…舞台やってきてよかった…」

と心から思います。

今年は2023年度後期の連続テレビ小説「ブギウギ」に橘アオイ役として出演し、劇団の人生を、役を通して追体験する機会をいただきました。100年続けるということがどれだけすごいことか…身をもって体感しました。

OSK日本歌劇団は今年で創立102年。そして聖母は創立100年。

同じ時代を歩んできた劇団、学校に自分も在籍できていることになんだか素敵なご縁を感じます。日本の激動の時代をそれぞれの形で戦い今に繋げてくださった先輩方に感謝してこれからも精進して参ります。

木野 仁郎

聖母女学院小学校卒業。高槻中高を経て2010年帝京大学医学部卒業。関西医科大学附属病院での初期研修を修了後、2012年同大学小児科学教室へ入局。附属病院や地域の関連病院での勤務を経て、大学院へ進学し小児特発性ネフローゼ症候群について基礎研究に従事。2016年から米国オハイオ州のNationwide Children's HospitalへResearch Fellowとして約2年間留学。帰国後、関西医科大学附属病院新生児集中治療室で約3年半勤務後、2021年から大阪旭こども病院で勤務。小児科専門医、関西医科大学大学院医学研究科博士課程単位修得(医科学専攻生体応答系小児科学)。現在は同病院診療部長。

4世代を通して学んだ感謝の心

私は小学校時代を大阪聖母学院小学校で過ごしました。当時、男女共学になって数年目だったことと、祖母と母も卒業生だったこともあり、祖母と母に続けて3代お世話になりました。小学校時代の思い出はどれも素晴らしく枚挙にいとまがありませんが、クラスメートと協力して課題を乗り越えていった合宿や運動会などの行事が特に思い出深いです。小学校生活を通して「感謝の心」と「謙虚な心」をもって周囲に接することの重要性を学び、これらは社会人になった今でも大事な礎になっていると感じています。

小学校の卒業文集に書いていた夢が叶い、現在は目標であった小児科医師となり、大阪市内の小児病院で勤務しています。小児科は新生児から学童期のみならず成人になるまでの年齢に全て対応します。体の病気を見つけて治療するのは勿論のこと、発達や発育の問題がないか、家庭や学校といった社会・環境面にも目を配って健全な成長をサポートすることが大切です。外来や入院での診療は、子供たちの人生からみるとほんの一部分の期間ではありますが、子供たちの将来に少しでも良い効果が出ればよいなと日々奔走しています。

私の娘も4代目として香里ヌヴェール学院に入学し小学校生活を送っています。小学校時代の恩師の先生に成長した姿を見て頂けたことはとても喜ばしく、少し恩返しができたような気持ちでした。今後はこれまでに先生方から頂いたご恩を、次世代の子供たちのために送っていけるように尽力していきたいと思います。

深見 まどか

聖母学院中学校卒業後、東京藝術大学附属音楽高等学校、同大学を経て、パリ国立高等音楽院修士課程を首席修了。青山音楽賞新人賞、ロンティボー国際コンクール、ブゾーニ国際コンクールなど多数入賞。関西フィル、東京フィル、パリ室内管との協演や、ドビュッシーピアノ作品全曲リサイタル、NHK-Eテレ・NHK-FMなどのメディア出演、CDリリース(レコード芸術誌特選盤選出)など、国内外で活躍中。京都新聞「日本人の忘れもの2023」に寄稿。現在大阪教育大学ピアノ科非常勤講師。

創立100周年によせて

「マリアさまおはようございます」の掛け声と共に、ロザリオと幼稚園バッグを振り回しながら始まった私の聖母学院での生活は、中学校卒業まで計11年間続きました。幼稚園・小学校で学んだカトリックの隣人愛精神の大切さに加えて、中学校生活で印象深かったのは、先生方の熱心な指導、授業の質の高さです。担任の先生方や音楽の先生方のサポート体制にも本当に恵まれていました。制服の着崩しや鞄の中身で呼び出されたことも思い出ですが(笑)、親身になって話を聞いてくださる先生方のおかげで、勉強と両立して音楽活動に打ち込むことができました。授業はわかりやすく、疑問点には丁寧に答えてくださり、問題集を解く面白さもありました。大学のセンター試験準備では、聖母の授業ノートが役立ってくれました。

現在は、ピアニストとしてフランスと日本を行き来しながら演奏活動・音楽教育に携わっておりますが、争いの絶えない現代社会で心が荒みそうになっても、聖母で学んだ隣人愛精神にいつも助けられます。ライバル達と争うのではなく、それぞれの良さを認め合い、助け合って切磋琢磨するから成長できる。戦うべきは常に自分であり、競争の先にある人間同士の結びつきを大切にしていきたいです。これからもピアノの演奏を通して、世界中の様々な人と幸せを共有していきたいと思います。

私の人生基盤となる学びをたくさんくださった聖母学院。創立100周年を心よりお祝いし、末永いご発展を祈念いたします。

松井 今朝子

1953年生まれ。京都祇園の南座にほど近い環境で育ち、子どもの頃より歌舞伎の魅力にとりつかれる。小学校から高校までを聖母学院で過ごし、早稲田大学大学院文学研究科演劇学修士課程修了後、松竹株式会社に入社。歌舞伎の企画・制作に携わった後フリーとなり、故・武智鉄二に師事。歌舞伎の脚色・演出・評論などを手がける一方、歌舞伎啓蒙媒体の監修に積極的に取り組む。97年『東洲しゃらくさし』で小説家としてデビュー。同年『仲蔵狂乱』で第8回時代小説大賞受賞、2000年に市川團十郎、新之助の出演でTV化された。その後『幕末あどれさん』『奴の小万と呼ばれた女』、初の捕物帳『一の富　並木拍子郎種取帳』を発表。2007年『吉原手引草』で第137回直木賞、同年京都府あけぼの賞、『芙蓉の干城』で2018年度第4回渡辺淳一文学賞を受賞。

聖母の思い出

わたしが聖母学院小学校に入学したのは1960年の春。ちょうど日本が高度経済成長期に入って劇的な変化を遂げ始める時代でした。それでも当時の聖母はまだ牧歌的な雰囲気を湛えていました。校門を入ったらすぐに白いヤギとアヒルが出迎えてくれたし、優しいシスターの先生方が多くて、授業も今から見れば実にのんびりしたものでした。放課後は友だちときれいな緑の芝生に寝転がって青空を見あげ、雲の形で色んな動物や人の姿を想像する遊びが楽しみでした。現人類ホモ・サピエンスが自然淘汰で今日に生き残って繁栄している一番の理由、そしてAIと競うようになるこれからも必要なのは「想像力」だという説があります。少なくともわたしを小説家という今の職業に導いたのは、当時の聖母のゆったりした環境で育まれた想像力なのです。思えばプロの小説家をわたしが初めて見たのも聖母でした。高2の時に「高校生のための文化講演会」が催され、その講師として来校された中村真一郎先生は戦後文学の旗手として名高い文壇の巨匠で、当時は比較的少人数だった我が校に来られたのがふしぎなくらいでした。いわゆる「純文学」の小説家だった中村真一郎先生のお話を、高2のわたしが理解するのはかなり難しかったようで、恥ずかしながら講演の主題は全く憶えていません。ただ先生がいわばリップサービスのようにして話された内容だけは今に残っています。

−日本の文化は京都という町を識っていないと理解できない。西洋の文化はキリスト教を識ってこそ理解できる。その意味で、あなた方はとても恵まれているのだ。−先生にそういわれた時はちょっとびっくりしたほど、わたしは学びの環境に無頓着でした。しかし以来ずっとそれが心に留まって、深いところでの自信につながっているような気がします。当時は少人数でぼやっと学んでいた感じの母校だったから、東京の大学に行って全国のエリートを目にした時はいささか引け目を感じたものですが、そういう時もそれが心の拠り所になったのを最後に打ち明けておこうと思います。

安井 浩美

1963年、大阪生まれ。聖母女学院短期大学を卒業後、アパレル会社勤務。約1年間のシルクロードの旅を経て写真の道へ。1993年、フリーのフォトグラファーとしてアフガニスタンを取材し、戦争取材とともにアフガン遊牧民の記録をライフワークとする。2001年の米同時多発テロをきっかけにアフガン入り。現在、共同通信社のカブール支局で通信員として働くかたわら、アフガニスタンの女性と家庭の経済支援の一環でクラフト工房を運営している。アフガニスタンの外国人ジャーナリストの中で、最も長い滞在者のひとりとして活動を続けている。

私の人生で最も平穏で楽しい時間を過ごした聖母での学びの日々

2021年8月、イスラム主義組織「タリバン」が私の暮らすアフガニスタンを掌握しました。過去の経験から人々は、タリバンを恐れ空港に押し寄せました。私は、大混乱の中、唯一の日本人として自衛隊機で隣国パキスタンへ退避しました。まもなく2年になりますが昨日のことのように思い出されます。

退避3か月後には、再びアフガニスタンに戻り現在も首都カブールで愛猫、愛犬と共に暮らしています。世界で唯一女子の中等教育を禁止するアフガニスタン。ふと自身の学生時代を思い出し、当たり前に過ごした学生時代を回想し、アフガンの少女達のおかれる状況に照らし合わせてみることもあります。「自分は何て恵まれていたのか」と思わずにはいられません。アフガンの人々が平穏な暮らしを手に入れる日を願ってやみません。

畑中 敦史

1975年聖母学院小学校卒。
山西惇として俳優業を営む。2000年より刑事ドラマ「相棒」シリーズに角田課長役として出演中。
主な出演作：映画「Dr.コトー診療所」／大河ドラマ「真田丸」／日曜劇場「半沢直樹」／舞台「エンジェルス・イン・アメリカ」「闇に咲く花」ほか。左記2作の演技により第31回読売演劇大賞最優秀男優賞を受賞。

右の頬を打たれたら、、

学校法人聖母女学院、創立百周年誠におめでとうございます。

私は1962年生まれですので、1969年から1975年まで聖母学院小学校にお世話になったことになります。今思い返しても、小学校で過ごした6年間は、自分の精神的な支柱となっていると感じます。

2年生の音楽の時間に「ペルシャの市場にて」に合わせて出鱈目な踊りを同級生たちと拵えたこと。3年生の国語の時間に、失敗したら次の人に交代するというルールで、一度も間違わず最後まで朗読が出来たこと。4年生の時に担任の門籐先生から教わった宮沢賢治の魅力。4、5年生の昼休みに岸くんと二人でクラスの皆んなに披露していたフィンガーファイブや西城秀樹さんの真似。6年生でジャングル黒べえを選挙キャラクターに据えて児童会長に選ばれたこと。そのどれもが、今もこうして俳優として舞台に立っている自分の礎になっていると気づき、感謝の気持ちで一杯になります。

今より遥かにおおらかな時代というのもあるのでしょうが、本当に自由に学びたいことを学び、素敵な友人たちと出会えた、かけがえのない時間だったと思います。50歳を過ぎた頃から、子育てや仕事が一段落した小学校の友人たちが舞台を見にきてくれるようになりました。そしてまた新たな関係が築けています。それもまた誠にありがたいことであります。

そんな小学校の宗教の時間、私の人格形成に、大きく影響を与えたであろう一つの言葉があります。

マタイ伝第5章39節「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ」

これは、子供心に衝撃でした。え、どういうこと?と。右のほっぺた叩かれて、叩き返さずに、左も出すの?意味わからん!と、その時は思っていました。大人になり、その真意がわかり（さまざまな解釈があるとは思いますが）、なんとも奥深い言葉であるなあと、今この時代において、大変意味のある言葉なのではないかと思うようになりました。少し前に「やられたらやり返す、倍返しだ!!」なんてドラマが流行りました。私も出演させていただきましたし、ドラマ自体はとても痛快な傑作だったと信じていますが、やられたらやり返す、とか、倍返し、なんて言葉だけ一人歩きして、自分の子供たちが嬉しそうに使っているのを見たりすると、自らの小学校時代を思い出し、ちょっと待て、イエス様はこんな素敵な言葉を残されているよ、と教えたくもなるのです。

人類の歴史は報復の繰り返しなのかもしれませんが、だからこそ、左の頬を差し出す大きな大きな愛が必要なのではないか、と、日々、目に耳に飛び込んでくる悲しいニュースに触れるたび、強く思う今日この頃であります。

そしてこれからも我が母校、聖母学院の更なる発展を心より祈念して止みません。

聖母女学院創立100周年に寄せて

聖母女学院・大阪聖母女学院・香里ヌヴェール学院高等学校
同窓会 かおり会

会長　木野 安奈

聖母女学院創立100周年に寄せて

学校法人聖母女学院創立100周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また、長きに渡り学校運営に力を尽くして下さった多くの関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

同窓会かおり会は、同窓生の親睦を図り、母校と会員相互の幸せを願う団体として1928年に発足され、創設当初より、さまざまな活動を通して学校と深く繋がってまいりました。2023年現在、会員数は12,000人を超える大きな団体となりました。皆が一丸となって母校を支援すべく、微力ではありますが活動を続けております。

毎年、6月には『かおり会の集い』を実施し、先生方や同窓生とともに親睦を深め、同時に金祝（卒業50年）、銀祝（卒業25年）のお祝いをいたします。母校の行事では中高体育祭の応援や文化祭での出店など。死者の月である11月には、帰天された会員や母校にゆかりのあるシスター方、先生方を偲んで『追悼ミサ』を行っています。創立者レヴェランド・メールがご逝去された12月、そして6月にも、美井霊園まで墓参と清掃に参ります。1月には『はたちの集い』を実施し、20歳を迎える小中高の同窓生が母校に帰ってきます。2月には『かおり会入会式』を開き、新しく会員になる卒業生をお迎えします。

創立者レヴェランド・メールは入学式の日に、かがみこんで児童・生徒一人ひとりの胸に校章をつけてくださったそうです。校名が香里ヌヴェール学院と変わった今でも、校章に刻まれた“OBEISSANCE ET PURETE”［従順と純潔］の精神は、今もそしてこれからも変わらず児童・生徒の心に刻まれていくことと信じております。

“OBEISSANCE”とは、「耳を傾けて深く聴く」ということ。単に「聞く」のではなく、「本当のことを聞き分け、それを実行する。」今、私たちの小さな助けを必要としている人々の声に注意深く耳を傾け、その叫びに応え、実行しましょうという意味。“PURETE”は「混じりけがない」「純粋である」ということ。具体的には「澄んだ眼差し」「心の清らかさ」「偽りのない正しい生き方」を意味します。レヴェランド・メールが、この学校に集うすべての人にこのように生きて欲しいと心から願われていたことでした。

本校は、母校を愛してやまない同窓生、日々児童や生徒のために心を尽くして下さっている学校関係者の皆さま、またそれぞれのご家族によって支えられているとつくづく感じます。愛と感謝と希望をもって、明るく朗らかに、これからも母校を応援していきたいと強く思います。そして、次の100年に向かって益々ご発展されますことを心よりお祈り申し上げます。

かおり会のあゆみ

1928年　同窓会のはじまり（第1回卒業生が巣立つ）
1936年　「かをり」第1号発行
1939年　新会員歓迎会開始
1955年　「かおり」復刊　「創刊」第一号として発行
　　運動会に売店をはじめる
1956年　同窓会 東京支部発足
1958年　ベルナデッタ聖母ご出現100年祭に
　　「聖母の旗」を贈呈　祝賀会に参列する
1960年　奈良奥山めぐりをする（校外行事のはじまり）
　　同窓会会長に校長
　　初代副会長に諏訪由子姉が任命される
1965年　第1回総会（ベルナデッタ会）
　　レヴェランド・メールお墓参りをする
1975年　茶房「かおり」と小物店をひらき興をそえる
1978年　同窓会発足50周年記念総会
　　同窓会を「かおり会」と命名
2000年　インターネットホームページ開始
2008年　第1回成人の集い開始
2018年　第1回追悼ミサ開始
　　総会から「かおり会の集い」へ変更
2019年　小学校同窓会「さくら会」と合同で成人の集い開催
2021年　かおり会Instagram開始

かおりちゃん人形

「かおり会」と命名

第1回成人の集い

聖母学院同窓会
会長　大江　信行

100周年を迎え

同窓生の皆様如何お過ごしでしょうか？平素は同窓会活動にご協力賜り誠にありがとうございます。昨年度は学院100周年を迎えるにあたり6月に記念ミサ、記念祝賀会と大変おめでたい行事が続きました。両行事とも人数制限のある中、多くの同窓生の皆様にご協力とご出席賜り、同窓会と致しましてもとても誇らしく嬉しい時間となりました。また祝賀会に於きましては、微力ながら私も祝舞を勤めさせて頂き光栄の至でございました。お陰様でご臨席の皆様からお褒めのお言葉頂戴いたしましてホッと胸を撫で下ろしております。そして100周年を迎えるに当たり同窓会より記念品（記念鉛筆及びボールペン）を在学生の皆様へ贈呈させて頂きました。また学内へ記念碑の設置も予定致しております。同窓生の皆様も来校の折にご覧頂ければ幸いです。

さて昨年は大変おめでたい年ではありましたが、とても悲しいお知らせもございました。シスター岡田がご逝去され天へと帰ってゆかれたのでした。私も小学校時代に校長先生をお務めになられており、沢山の教えを頂いたことを覚えており、あの優しい笑顔にお目にかかれないことをとても寂しく感じております。しかし100周年を期に、これまでに帰天された沢山のシスター方や先生方の思いを受け継ぎ、同窓会として新たな気持ちで未来へと進みたいと存じます。引き続き皆様の変わらぬご支援とご協力をよろしくお願い致します。

創立100周年記念碑を
藤森キャンパスに寄贈

聖母学院同窓会のあゆみ

1955年　聖母学院同窓会発足
1963年　同窓会だより　第1号発行
　　学院バザーに参加
1979年　関東支部第1回総会
1985年　タイミッション活動に協力（～2006年）
1992年　追悼ミサ開始
1999年　同窓会ベルナデッタ会　インドボーイズタウン里親援助開始
　　ボランティアSEIBO開始
2000年　手作り講座開始（～2012年）
2002年　中高学院祭同窓会サロン開始
2004年　同窓会50周年感謝のミサ・記念総会・記念コンサート
2005年　小学校運動会にて飲み物販売開始
2009年　小・中・高・同窓会共催　成人のつどい開始
2014年　同窓会60周年感謝のミサ・記念総会
2015年　シスターとお話する会開始
2021年　成人のつどい　小・中・高・同窓会完全一体化共催開始
2022年　同窓会70周年記念総会
2023年　成人のつどいを二十歳のつどいに改称
2024年　創立100周年記念碑寄贈

創立100周年記念総会　鏡開き

毎年発行『同窓会だより』

追悼ミサ　修道院にて

二十歳のつどい

聖母女学院短期大学同窓会
会長　辻田　富士子

建学の精神を心に

学校法人聖母女学院創立100周年と記念誌編纂にあたり、心よりお祝い申し上げます。

聖母女学院短期大学は、1962年4月、香里キャンパスに家政科が開設され、1963年3月に聖友会（同窓会）が発足されました。

1968年4月、藤森キャンパスに児童教育科が開設され、1970年11月飛翔会（同窓会）が発足されました。

1981年藤森キャンパス新学舎への全学移転にともない同窓会も一つとなり聖母女学院短期大学同窓会となりました。同窓会発足当初よりお力添え下さいましたシスター方、先生方、職員の方々、本当に有難うございました。母校と卒業生のパイプ役としてイベントの開催、会報発行等ご尽力下さいました同窓会役員の方々にも感謝致します。

2018年3月、設立から56年間の歴史を刻んだ短大に幕を閉じましたが同窓会は特別会員の皆様、卒業生が繋がりを持てるようにと微力ですが努力してまいります。

2019年1月には有志の方々が聖歌隊「聖母エンジェルス」を結成され、月1度第3土曜日に集まり練習されています。学校法人聖母女学院創立100周年記念ミサでは聖歌を披露して下さいました。

2020年からは同窓生同士の親睦と交流を目的とした新しい取り組みとして公開講座を開催しています。コロナ禍のスタートでしたので、第1回目は1回のみの開催となりましたが、楽しい交流の場となりました。第2、3回目も塩麹仕込み、飲茶、ウォーキング、ヨガ、フレッシュクリスマスリース、しめ縄リース等、どの講座もいろんな年代の方々と楽しい時間を共有することが出来ました。

母校は無くなりましたが卒業生の皆さんが建学の精神を心に家庭または社会に惜しみなく力を発揮されますよう皆様のご活躍をお祈りし、学校法人聖母女学院のより一層のご発展をお祈り致しております。

聖母女学院短期大学同窓会のあゆみ

1963年3月26日　香里キャンパス聖友会発足
1970年11月15日　藤森キャンパス飛翔会発足
1981年　藤森新学舎に全学移転にともない聖友会、飛翔会は聖母女学院短期大学同窓会とする
1996年2月　ゆりの会第1回ゴルフコンペ開催
2000年　同窓会コーラス部誕生
2002年6月30日　リーガロイヤルホテルにて同窓会創立40周年祝賀会開催
2015年4月　京都聖母女学院短期大学同窓会とする
2015年12月6日　ウェスティン都ホテルにて同窓会創立50周年祝賀会開催
2016年3月6日　同窓会創立50周年記念公演
　「狂言を楽しもう」を金剛能楽堂にて開催
2018年3月　京都聖母女学院短期大学閉学
2018年11月10日　感謝の集い、閉学記念ミサを体育館にて開催
2019年1月　聖歌隊「聖母エンジェルス」を結成
2019年5月　京都聖母女学院短期大学記念室を開設
2020年　第1回公開講座開催（12月）
2021年　第2回公開講座開催（12月）
2022年　第3回公開講座開催（10・12月）
2023年　第4回公開講座開催（6・9・10・12月）

聖歌隊

ウォーキング

ヨガ

クリスマスフラワーアレンジメント

さくら会
会長　大塚 広晃

何年経っても変わらない聖母の良さ

学校法人聖母女学院関係者の皆様、そして卒業生の皆様、創立100周年誠におめでとうございます。

香里ヌヴェール学院小学校(旧大阪聖母学院小学校)同窓会　さくら会　会長の大塚広晃です。

さくら会は、1994年に小学校を卒業した共学以降の卒業生のための同窓会で、役員は40歳前後の働き盛りのメンバーで構成されており、時間を作ることが難しい中ではありますが、活動を続けております。

私が大阪聖母学院小学校在校時には、70周年の行事が開催されました。

当時、玉造の教会でミサに参加したことが思い出されます。

あれからあっという間に30年が経ち、100周年を迎えた聖母の長い歴史とそれに携わってきた方々の多さに驚いております。

卒業してから感じる聖母の良さはたくさんありますが、特に先生方や友人とのつながりが今現在も保たれているのは、聖母の教育を受けた私たちだからこそ感じられることではないかと思います。

何年経っても頼れる仲間が周りにいる。聖母に通うことができてよかったと本当に感じる部分です。

さくら会の近年の活動について

さくら会では少しでも母校や卒業生のために様々なことを還元できるよう活動を続けております。新入生には6年間大切に使ってもらうファイル、卒業生には卒業記念のボールペンを毎年寄贈させていただいており、大事に使っていただいていることを嬉しく思います。コロナ禍前までは、運動会での売店の運営を行い、保護者の方や卒業生にも大変喜んでいただけました。また、毎年1月の成人の日には、かおり会様と合同で「はたちの集い」を開催しております。二十歳を迎えた卒業生が久々の母校での友人や先生方との再会を楽しんでいる様子を見るのは、こちらも笑顔になってしまうものです。2023年には、はだしの広場に遊具を寄贈させていただきました。草木が生えた小山状の遊具になっており、子どもたちがそれに登ったりトンネルをくぐったりと、毎日楽しく遊んでいる様子が目に浮かびます。

さくら会のあゆみ

1994年　大阪聖母学院小学校同窓会「さくら会」設立
2008年　大阪聖母学院小学校同窓会報「Portail(ポルタイユ)」第1号発行
2011年　第1回成人のつどいを開催
2015年　運動会にて売店を運営。パンやジュース、レジャーシートなどを販売
　　卒業記念品として「多機能ボールペン」と「ボールペンケース」を寄贈
2016年　さくら会 総会を開催
2017年　入学記念品として「青いファイル」を寄贈
2019年　「成人の集い」をかおり会様との合同開催に変更
2023年　はだしの広場に遊具「お山」を寄贈

さくら会が運営する運動会の売店

会報『Portail』

はたちの集い

香里ヌヴェール学院保護者会
会長　北中 紀子

子どもたちのより良い学校生活のために

聖母女学院創立100周年、まことにおめでとうございます。この大きな節目の瞬間に立ち会えたことは、とても光栄であり、感謝の念に堪えません。また、この素晴らしい学院を創設してくださった創立者の7人のシスター方と、長年にわたり学院の発展にご尽力してくださった教職員の皆様に、心からの敬意と感謝を申し上げます。

さて、保護者会では、今年度、4年ぶりに活動を全て再開させました。コロナの影響で3年間学年委員の募集ができませんでしたが、今年度募集したところ、小学校と中高を合わせて56名の保護者の方が手を挙げてくださいました。また、小学校では初めての立候補制にしました。世間ではPTA活動について様々な議論がされている中、学校のために積極的に奉仕をしてくださるお気持ちに感動しました。

学年委員は、文化教養部、ボランティア部、広報部の3部会に分かれて小、中、高の保護者の方が一緒に活動していただきますので、縦のつながりが生まれます。活動の中でお互いの子育ての悩み事などを相談し、良い関係性が保護者同士でも生まれています。

また、評議員は1年を通しての大きな活動として文化祭での飲食の販売を行なっています。今年度は初めて2日間出店し、パスタ、サンドウィッチ、ドリンクを販売しました。前日の準備も含め連続3日間、早朝より活動しておりますが、評議員の皆様の感想は、楽しい時間だった、来年はこうすれば良いと思う、ここは見直すべきだというように、次年度の為に前向きな意見が飛び交います。文化祭の疲れも忘れるほど楽しく、学生時代に戻れる良い時間です。

2022年度の保護者会の取り組みとして、1934年に建築家アントニン・レーモンド設計の雨天体操場は、2021年までトレーニングルームとして活用していましたが、香里移転90周年記念事業として、新たに食堂に改修されました。保護者会の会員の皆様に多くのご協力をいただきました。食堂(ルルドホール)ができたことで、学生や教職員の皆様の昼食利用のほかに、保護者会文化教養部の講座、親睦会、卒業パーティや謝恩会のお弁当の依頼など、様々な活動や交流の場となり、学校の新しいかけがえのない憩いの場となっております。

保護者会は学校と保護者の皆様の間に入り、子どもたちの学校生活がより良いものになるよう努めます。昭和13年に成立され、初代田辺平三郎保護者会会長様より今日まで受け継がれた伝統に、新しい風を吹き込みながら貢献して参ります。最後に、更なる100年に向けて聖母女学院の益々のご発展を祈念いたします。

香里ヌヴェール学院保護者会のあゆみ

2015年　大阪聖母女学院後援会設立
2017年4月1日　香里ヌヴェール学院に校名変更、男女共学化
2021年7月21日　香里移転90周年記念事業委員会発足
　　建築家アントニン・レーモンド設計のトレーニングルームを食堂に
2022年6月4日　食堂ルルドホール開設式
2023年4月19日　100周年記念グッズ (株)ファミリア様と考案
　　準制定品としてデニムバッグ、A4型手提げかばん、ポーチを製作
2023年11月18日　100周年記念グッズ
　　探究 ICT 公開授業研究会にて完成品発表

文化祭保護者会写真(2023)

ファミリアとのコラボ商品

保護者会文化部教養講座

京都聖母学院保護者会・後援会
会長　芹澤　千絵

保護者会のあゆみ

学校法人聖母女学院創立 100 周年、誠におめでとうございます。保護者を代表いたしまして心よりお祝い申し上げます。また、長きにわたり建学の精神を守り次世代に伝承してこられた皆様に心から敬意を表します。1949年、藤森の地に京都聖母女学院が誕生した際は、戦後の物資不足の中、生徒、保護者、教職員が一丸となり全てを手作りで整えられたと記録に残っています。創立者が願った「奉仕の精神」は当初より生徒やその保護者にも受け継がれ、今日に至っております。学校の設備整備など大きな事業では保護者会として様々なご協力を行ってまいりました。父親の会を立ち上げ、グラウンドの草抜きや、遊具のペンキ塗りをしたり、「こども未来プ ロジェクト」と称して演劇や絵本の読みきかせ、夏祭りのイベント等を行っていた事もあったそうです。歴代の会長様をはじめ保護者の皆様の想いを引継ぎ、近年では、小学校保護者様による手作り品の販売やリサイクルバザー、古本市、児童参加型イベント「チャレンジサマー」の企画運営などボランティアを募り活動しています。毎年多くの保護者様が参加を希望され、子どもたちも毎回楽しみにしています。中高では学院祭への出店、制服リサイクルバザーなどを企画運営し、生徒と共に学校行事を盛り上げています。また、「学校は単に知識を伝達するための場ではなく、保護者、教育者、生徒からなる学校共同体の中で、人々とのかかわりにおいて生きることを学ぶ場である」との創立者の教育理念のもと、全所属の保護者様を対象に研修会を開催し交流を深めております。しかしながら、新型コロナウイルスの蔓延によって、保護者会活動も休止を余儀なくされ、保護者にとっても学校へ足を運ぶ事が難しい状況が続きました。そのような中、保護者会として何かできることはないかと模索し、学校と保護者の繋がりを保てるよう、学校生活の様子、シスターや先生方のお言葉を紹介した保護者会通信を再刊いたしました。時代の移り変わりや社会情勢とともに、学校や子どもたちを取り巻く環境も変化していくものと思いますが、今後も保護者会は京都聖母学院の一員として、学校と手を携え、子どもたちの成長を支えていきたいと思います。

100年間受け継がれてきた、愛と奉仕と正義を貫き、他人を思いやる心を大切に、次の150年、200年へと歩みを進めていかれる事を祈念して、創立100周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

京都聖母学院保護者会・後援会のあゆみ

1955年	保護者会設立
2008年	プール更衣室の改修
2010年	劇団四季「エビータ」観劇（保護者会研修会）
2010年	トイレ改修開始（2022年までかけて幼・小・中・高の改修を実施）
2019年	小学校運動場の人工芝化
2022年	中高体育館空調整備
2023年	中高一般教室に電子黒板導入
	南門改修

シスターと初代保護者会長

夏祭り

小学校 サマーチャレンジ

中高学院祭保護者会ブース

聖母教育支援センター

2007年4月に聖母教育支援センターは開設され、特別教育支援室と地域家庭支援室が置かれました。

□教育支援室（2010年特別教育支援室を教育支援室に変更）

香里、藤森の両キャンパスに設置され、カウンセリング、箱庭療法、教育相談、子育て相談、プレイセラピーを実施し、配慮が必要な子どもたちがより自然な集団生活や家庭生活が出来るよう教育支援活動を行っています。

□ボランティア室（2010年地域家庭支援室をボランティア室に変更）

聖母の子どもたちは本学院の建学の精神である「愛・奉仕・正義」の精神を日々学び身に付けようとしています。その子どもたちを見守り導くべき「聖母ゆかりの大人」がその精神を理解し、具現化し、子どもたちへのフィードバックが出来る活動を少しでも担えればと考え、聖母ゆかりの方々が参加、協力、活動しやすい場を提供出来るようにしています。学内のみならず学外にも目を向け、可能なものは地域行事に参加し、地域との一体感を更に深め、地域から理解され、愛される学院であるよう努めています。
現在、香里キャンパスは桜樹会、藤森キャンパスでは藤の会、かめの会、ガーデニングのグループが活動しています。

● 香里キャンパス

桜樹会 …… 預かり保育、手作り品販売、寄贈品バザー、手作り体験等の売り上げを被災地等に寄付しています。また紙芝居のグループは自分達で紙芝居を制作し、ヌヴェール小学校の休み時間に図書室で上演しています。

● 藤森キャンパス

藤の会 …… 幼稚園、小学校、中高のバザーでの手作り品の販売、幼稚園入園準備品の販売、深草100円商店街への参加。バザーの売り上げは被災地等に寄付しています。

かめの会 …… 目の見える人も見えない人も共に楽しめるように、大阪にある点訳絵本図書館「ふれあい文庫」から依頼された絵本を点訳絵本に仕上げてお渡ししています。

ガーデニング …… 正門ロータリー、マリアさまの周り等の草抜き、また季節に応じた苗を植え替え、季節にきれいな花が咲くよう手入れし、子供たちや来校された方の気持ちが和んでいただければと思い活動しています。

活動の実績

［聖書のつどい］
［公開講座］マリア祭「聖母講座」/ 生涯養成講座/ 子育て支援講座/ ボランティア講座/ いのちを学ぶつどい/ 手作り講座
［ボランティア活動］ペンギンの会（朗読）かめの会（点訳）桜樹会（預かり保育、紙芝居の制作、上演、手作り品制作販売、大阪聖母保育支援室手伝い）藤の会（預かり保育、手作り品制作販売、紙芝居制作、上演、地域のイベントに参加）ガーデニング
※ バザー等の収益は被災地等に寄付しています。
［東日本大震災復興支援マリア祭記念チャリティーコンサート］
［南三陸町支援ボランティアツアー］2011年8月から（第4回目以降より南三陸町支援体験ツアーとする）
［法人本館見学案内］2015年～
［京都聖母学院幼稚園・インターナショナルプリスクールでのお花のお稽古］

聖母祭参加桜樹会

南三陸町支援体験ツアー

ボランティア活動

ガーデニングボランティア

ロザリオ祭記念講演会にて

あとがき

創立100周年記念誌を編纂するにあたって、司教様、知事様をはじめ、各方面のたくさんの方々からお祝いのメッセージを頂戴いたしましたこと、深く御礼申し上げます。また、発刊にいたるまでの今日、編纂委員の方々をはじめ、みなさまに多くの時間を頂戴し、編集と校正にご尽力いただきましたこと、さらには貴重な資料やお写真をご提供いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

100年の歴史と申しましても、大阪香里園、京都藤森、二つの学舎の歴史が有機的に関連しながら成長していくその過程は、紐解くにしたがって、わたしにとっても新しい発見の連続でした。また、時代によっては鮮明な資料が少なく、記憶から失われつつある部分もあり、それを補完してくれたのは、折々に先人がまとめてくださっていた記念誌や会報でした。そこには、聖母の精神を残し伝えていきたいという、情熱が読み取れるものばかりで、読み返すたび敬服せずにはいられませんでした。

奇しくも、すばらしい物語を紡ぎ、世界中に夢を与え続けているディズニーも、2023年創立100周年にあたるそうです。2023年はその特集番組を見かけることが多くありました。3DCGアニメーションなど、コンピューター技術が進歩した今でも、ディズニー本社スタジオでは、手書き時代のアニメーターたちが残した原画資料が、アーカイブス（資料館）に保管され、現代のアニメーターたちの参考になり続けているとのことです。また、創始者ウォルト・ディズニーは、創立当初から、制作資料の保管の重要性を知っていたそうです。

この特集番組をたまたま目にしたわたしは、今回の記念誌の編集になぞらえ、単なる記念誌の制作という意味ではなく、聖母女学院の歴史の流れの中で、とても重要な役割に携わらせていただいているのでないかという思いに駆られました。歴史は過ぎ去るものではなく、今もなお、リアルタイムにメッセージを発し続けてくれている、そんな気持ちで見直すと、先人が残されたことばのひとつひとつ、白黒写真のひとつひとつが、まるで色鮮やかに飛び込んでくるかのようです。それは過去からのメッセージでありながら、はるか未来の行く先までも先導してくださっている、消えないトーチのようなものではないでしょうか。

たくさんの方々に支えられ、今日まで発展してきた聖母女学院の歴史のすべてにある、情熱と思いやりと信仰に大いなる敬意を表しながら、この記念誌を結び、重ねてみなさまに感謝の気持ちをお伝えして、筆をおくこととといたします。

まことにありがとうございました。

—表紙のデザイン—

「7色の糸からなるオーガンジー」をモチーフに、100周年の先、未来にかかる「アルカンシエル（虹）」をデザインしました。スクールカラーのブルーにつながる7色のカラーで「7人のマ・メール」「現所属7校」を表現しています。建学の精神「愛」「奉仕」「正義」によって綾なされた1枚の織物を、意志ある未来への架け橋に見立てています。

100th Anniversary 聖母女学院 創立100周年記念誌　2024年3月発行

発行　学校法人 聖母女学院
編纂　学校法人 聖母女学院創立100周年記念 記念誌編纂委員会
制作協力　大日本印刷株式会社 / 株式会社DNPコミュニケーションデザイン
印刷　大日本印刷株式会社